



# ココア アデー デイク ミッション



藤間紫苑

イラスト  
石原理

## キャラクター紹介



## 人物紹介

### ★ 名波響 (ななみ ひびき)

『伊藤君と円先輩』の主人公・伊藤若葉のお兄さん。伊藤苑創業者一族の孫。嫡男。

学生時代、コカと付き合っていた。

名波とコカとの関係は書籍及びブログ参照。

表紙イラスト左側が名波です。

### ★ 山河有 (やまかわ あり) 愛称・サンガ

伊藤若葉に恋するライバル会社エージェント。

名波との関係はブログ参照。

表紙イラスト後ろがサンガです。

### ★ 古河 (こかわ) ・C・ジョン 愛称・コカ

円青樹を引き抜こうとしているライバル会社エージェント。昔、名波響と付き合っていた。

表紙イラスト右側がコカです。

### ★ 伊藤若葉 (いとう わかば)

伊藤苑創業者一族御曹子。次男。名波響の実弟。円青樹の恋人。

### ★ 円青樹 (まどか せいじゅ)

伊藤苑研究室室長。伊藤若葉の恋人。

若葉が伊藤家御曹子だと知っているが、名波響の素性は知らない。

★ 三鳥井寿（さんとりい ひさし）

円青樹を引き抜こうとしているライバル会社エージェント。

★ 朝比奈三也（あさひな みつなり 愛称あさひ）

円青樹を引き抜こうとしているライバル会社エージェント。

★ 牧歌れもん（ぼっか れもん）

円青樹を引き抜こうとしているライバル会社エージェント。

札幌家の養子になる。

★ 大同夢彦（だいどう ゆめひこ）

円青樹を引き抜こうとしているライバル会社エージェント。

詳しい人物紹介は書籍（書店にて購入可能）、または電子書籍『伊藤君と円先輩  
Labo』<http://p.booklog.jp/book/32898> をご覧下さい。

書籍にはカラーイラスト付き人物紹介が掲載されています。

## 序章

---

『伊藤君と円先輩』▼103本目『メローキイロー』 <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-118.html> から続く海外旅行篇を先にお読み下さい。

シーンは ▼110本目『三家サイダー プレミアム』 <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-125.html> のサイドストーリーになります。

古河・C・ジョンの招待を受け、南国リゾート地へ遊びに来た伊藤苑三人組。

自家用ジェット機の中で伊藤若葉の兄・名波響（ななみ ひびき）は山河有（やまかわ あり・愛称サンガ）の腕を取り、更衣室の隣にあるベッドルームへと連れ込んだのだった。

「何をするんスカ！」

サンガは腕を掴まれたまま、カチリ、という部屋の鍵が閉まる音を聞いた。背筋に冷たい汗が流れる。二人だけの密室。

名波響はサンガを乱暴に引っ張り、部屋の中央に立たせた。そして少女のような美しい顔をじっと見つめる。

「……お前さ、また伊藤君の事を『俺の嫁』とか言ったよな？ 調子に乗るなど前回警告したはずだが？ もう忘れたようだな」

そう言って名波はサンガの海水パンツを奪い、可憐な顔に叩き付けた。

「うっ！ やめろよ！」

サンガは水着を拾い、ぎゅっと握る。

恐怖で喉が渇く。

あの、初めて伊藤若葉と出会った夜。若葉に愛の告白をした日。サンガは名波響に連れられホテルの一室へと監禁された。そして行なわれた数々の屈辱的な行為。

愛しい恋人と迎える筈だったサンガの童貞は、このハンサムで冷酷な男に無理矢理奪われたのだった。二時間に渡る折檻。そう、それはセックスと呼べるものではなかった。泣こうが喚こうが強制的に行なわれる性技。繰り返し脳にインプットされる強い快感。ピンク色の小さな蕾にはたっぷりとジェルが塗られ、何度も何度も繰り返し名波響のペニスが押し込まれ、そして引き抜かれた。その都度サンガは悲鳴を上げたのだった。初めての経験。その新しい快感。

サンガの脳にその夜の恐怖、そして強い快感が蘇る。恐ろしさに体を震わせる一方で、自然と彼の柔らかいペニスは硬さを増していくのだった。

「着替えろ」

名波響はむっとした表情のまま、サンガに命令した。

サンガは俯いて、唇を噛んだ。

「早くしろ。また犯されたいのか？」

その冷たい声を聞き、サンガはびくっと震える。彼は仕方なくジャケットを脱ぎ、椅子の上へと掛けた。

シャツをゆっくり脱ぐ。レイプされた男の前で自ら裸になる。屈辱だった。ボタンを外す指が震える。頭の中に昨晚見た夢が蘇る。

コカから誘われたプライベート旅行。伊藤苑の三人も来るという。サンガは若葉と遊ぶのを楽しみにしながら眠った。しかし夢の中に出てきたのは名波響だった。

淫猥な夢。腰を高く上げ、名波響に後ろから犯され、あろうことか悦びの声をあげている自分。そんな夢をみて、下着を汚したことをサンガは恥じた。

しかし今。これは現実なのだ。サンガは目を見開きながらシャツをするりと脱いだ。白くきめ細かい肌が露わになる。恥ずかしさのあまり、サンガの瞳に涙が浮かんだ。

無表情だった名波響が意地悪く笑った。

「なんだお前、こんなに勃起させて感じてるのか？」

そう言うと名波響はぎゅっとサンガの乳首を捻りあげた。

「あうううっ！」

痛み。そして快感。

サンガは確かに名波響が嫌いだった。不快。恐怖。しかし彼の指は的確にサンガの気持ちいい場所を攻めてくる。その細い指がぎゅうっと乳首を掴み続ける。死にそうなほど痛い。だがその痛みがサンガにさらなる快感を与えた。

「ふん、変態だな。早くズボンも脱げ」

サンガは名波響の命令通り、靴と靴下を脱ぎ、ベルトを外し、ズボンを脱いだ。若葉に見せようと思った黒いボクサーパンツ一枚の姿になる。

「……乳首を攻められただけで下着を濡らしてレイプされた男の前でペニスを勃起させるとは、恥ずかしいと思わないのか？」

名波響は意地悪くサンガの耳元で囁いた。

サンガはふるふるっと体を痺れさせた。甘い声が脳を犯す。名波響の柔らかい息が耳をくすぐる。

その時、かちやりと鍵が開く音がして二人はハッと、ドアを見た。

「ベッドルームに鍵が掛かっているから何事かと思ったら、響。君か」

コカが呆れた顔をして、部屋に入ってきた。

あろうことか業界トップ企業のエリート社員であるコカに、勃起し、下着を濡らしている恥ずかしい姿を見られた。

サンガは真っ赤になって、椅子に掛けた服を取ろうとする。

そんなサンガの手を、コカはぐっと握り、止めた。

「サンガ君。慌てなくてもいい。別に私は君達の邪魔をしに入ったわけじゃないからネ。さあ、響。続けたまえ」

この時、サンガはコカが自分を助けてくれるわけではなく、響の共犯者になることを選んだのだと理解した。

自分よりも体格が良い男達に監禁されている。サンガの喉がごくりと鳴った。

それは恐怖のためか。それともこれから起こる悦楽の時間を想像したためか。

いや、もしかしたらサンガが名波響に無理矢理連れて来られたのを、コカは知らないのかもしれない。

サンガはコカに助けを求めようかと考えた。しかし名波響の冷たい視線に気付き、体を震わせ、口を閉じた。

名波はふっと意地悪く笑い、コカを見た。

「……ふん、悪趣味な奴だな」

「どっちが。私のベッドルームに男を連れ込んでいたぶっている君に言われたくはないネ」

「丁度この部屋が空いていたものでね」

「使うのは構わないが、せめて口だけにしてくれよ」

「……そうしよう。サンガ、さっさと水着に着替えろ」

サンガがおろおろしていると、コカがくっくっくっとして笑った。

「響も着替えたらどうだ？ どうせなら二人とも水着姿のほうが萌えるなあ」

「……まったく。部屋を借りたから、それぐらいはサービスしてやる」

サンガは名波響がジャケットを脱ぎ始めたのでドキッとした。しゅるりとネクタイが外される。男らしいその表情。サラリーマン姿だった名波響の肌が露わになっていく。鍛えられたその肉体。

いつも強制的にベッドへと倒され、暴力的なセックスをしていたサンガは初めて、名波響の肉体を落ち着いて見た。

柔らかそうな筋肉。引き締まった胴体。長い手足。

——美しい。

サンガは見とれてしまった。自分に酷いことをした男に。若葉と迎えるはずだった人生に一回しかない初夜を奪ったこの男に。

名波響の美しい瞳がちらりとサンガを見る。そして視線がすうっとコカへと流れる。一瞬頬を染めた名波響は、また無表情になり、作業的に靴下を脱ぐ。桜色の爪には透明のペディキュアが塗られ、キラキラと輝いていた。

こんな細かいところにも気を使う男なのだと、サンガは関心した。

そして何度もサンガの口に押し込まれた名波響のペニスが露わになる。少しだけ勃っている漢らしいそれに、サンガはあろうことか触れてみたいと思ってしまったのだった。

「……お前、何をしているんだ。早く着替えろよ」

名波響にきつく叱られ、サンガは慌てて下着を脱いだ。そして水着に足を通す。

彼はちらっとコカを見た。

コカは普段と変わらぬ和やかな表情でサンガの裸を、そして膨らんだ股間をじっと見ている。

そんな視線にサンガは感じてしまい、水着をじわりと濡らしてしまうのだった。

ふいに名波響がサンガの首筋にキスをした。

「あっ……」

サンガは艶っぽい声を出した直後にハッと、名波響の体を少し押した。

「あ、あのさ。コカさん、見てるじゃないツスカ。俺、あの、あんたとこういう事をしたいわけじゃ……」

「したくないのか？ 私と？」

「ああうっ！」

耳に響く優しく甘い声。そして陰囊を撫でられる快感。サンガは耐えられず恥ずかしい声を上げた。

名波響の長く繊細な指先が、そっとサンガの膨らみをなぞる。奥から、ずっと手前へと。そしてペニスの先へと。

「こんなになっているのか？」

「あ、あの……」

指がつうっとサンガをいたぶる。こういう時ばかり優しい声を出す名波響。

「したくないんだ」

サンガは頬を染め俯いて、目を閉じた。

「したい……ツス……」

一瞬、部屋がふっと冷たくなった。怒りのような圧力。サンガは体をビクッと震わせ、目を開け、きょろきょろと部屋を見渡した。名波響は変わらずサンガのペニスを弄び、コカは椅子に座って二人の様子を見ていた。

サンガはちらりとコカを見た。冷たい圧力はコカの方から来たように思えたのだ。だがそのような様子は見られなかった。柔らかい笑みを浮かべながら、暇そうに椅子に座るコカ。きっと彼にとってこのような情景は見飽きた、退屈なものなのだろう。

「そうか」

名波響が意地悪く笑い、赤いジュータンに膝を突く。

サンガは水着を乱暴に下ろされた。ぴんっと勃起したペニスが名波響に掴まれる。そして彼の柔らかい唇に触れた。

——綺麗だ。

舌を出す名波響の顔を見て、サンガは心を揺さぶられた。

あのレイプされた日も、その後も、先程も、何回も見ている顔だった。だが今日の名波響は妙に色っぽく肌が艶やかに輝いている。彼の細い柔らかそうな髪が額にかかる。上から見るとわかる異様に長い睫毛。濡れた瞳。すっと通った鼻筋。そして形の良い唇。そこから舌が伸び、サンガのペニスをくすぐった。

「あっ！！ なんスか、これ！？ えっ……？」

サンガの背筋がぞわっとした。少ししか触れていないのに、体中の血液が悦びに満ちたような幻。

生暖かくぬるぬるし、柔らかく優しく撫でられるような感触。

彼は真っ赤になった。そしてじっと名波響の舌を見た。

何か異様な感じがする。

だがこの目の前にいる普通のサラリーマンである名波響が何故そんな男に思えたのか。淫猥な悪魔のように。

名波響が舌を出し、つうっと唾液が垂らした。サンガのペニスを絡みつく唾液。そして流れる唾液を追うように、名波響の舌がつつーっとペニスを這った。

「ああっ！ はっ！ あっ！」

ペニスから伝わってくる目眩（めくるめ）く快感にサンガは体をびくびくっと震わせた。

名波響。

彼はサンガをレイプした男だった。それなのに彼は名波響から目が離せなかった。その美しい瞳が自分の性器を見つめている。たまにふと視線を上げ、サンガと目が合う。ワイルドな瞳。だがどことなく愛らしく、可憐にも見えた。サンガはそんな名波響を見てドキドキしてしまう。今も無理矢理ベッドルームへと連れ込まれた筈だった。なのに何故自分は名波響に「したい」と言ってしまったのか。

美しいレイプ魔に翻弄され、サンガは混乱していた。すぐ側に座っているコカへ、何故自分は助けを求めないのかと。

サンガの瞳にうっすらと涙が浮かぶ。

——卑怯ッス！ 綺麗過ぎるッス！

名波響がちらりとコカを見た。

サンガはふとその視線が気になった。もしかしたらコカに許可なくこの部屋を使った名波響はばつが悪いのかもしれない。だがそれだけではない何かがあるように思えた。

名波響の口が開き、そこに……。

「あ……！」

ペニスがゆっくりと咥えられていく。

生温かくぬるぬるした快感にサンガは震えた。

「あ、あ！ あっ！」

ペニスを咥える名波響はこの上もないほど艶っぽく輝いていた。

根本までペニスを咥えられたサンガは、興奮しながら名波響を見つめていた。美しい顔の中に埋まっていく自分の性器。陰毛に彼の柔らかい息がかかる。

名波響が瞳を上げた。煌めくその視線。

——俺のペニスが名波響の喉に触れてる……！ き、気持ちいい！

美しい唇の間から出るペニス。幻想的な光景だった。

一体自分は名波響に犯されているのか、犯しているのか。

また喉の奥にペニスが触れる。その気持ちよさに震え、サンガは少し腰を突き出した。

名波響の顔がかすかに歪む。喉の奥まで入れすぎたのか、彼はすっと体を引いた。

サンガは彼の艶かしい表情にドキッとしてしまった。

名波響の頭を押さえ、その口にペニスを突っ込みたい。捻じ込みたい。あの色っぽい瞳が涙に濡れるまで。

サンガがそっと名波響の髪に触れる。すぐさま、冷酷な男にギッっと睨まれた。

「手は後ろに組んでいろ」

「は、はい！」

サンガは手をぱっと後ろに回した。そして今、触れたばかりの柔らかい髪感触を思い出すのだった。

——さらさらだ……。柔らかくって、温かくって……。

サンガは胸をときめかせながら、名波響の顔を見た。クールなその表情。何故、一瞬でもその顔を歪ませたいなどと思ったのか。後で何をされるか分からないではないか。だが、手に残る感触。サンガは手をもぞもぞさせながら、その感触をリフレインしていた。

名波響がサンガの龟头を口に含む。

柔らかい舌がサンガをちろちろと弄ぶ。

「あ、あ、あっ！ あーっ！」

サンガは脳が弾けるような快感に身を震わせ、どくんっ、と射精した。

「……あ……」

次の瞬間。

その白い精液は赤いハンカチに包まれていた。

サンガはきよとんとし、ハンカチを見つめる。

一瞬のうちに名波響は後ろに引っ張られていた。

膨張したペニスから噴出したサンガの精液は、名波響の温かい口内ではなく、コカのハンカチへと回収されていたのだ。

「すっきりしたでショ？ 水着を穿きなさい、サンガ君」

「はい……」

コカはハンカチをくるっと丸めて、ゴミ箱へと投げ捨てた。

名波響の麗しい口内へと出される筈だった自分の精液。サンガは悲しそうな瞳でゴミ箱をじっと見つめてから俯き、水着を穿いた。

「……し、失礼します」

サンガはぺこっとコカにお辞儀をし、部屋を出たのだった。

ベッドルームに残った古河・C・ジョンと名波響は暫くの間、黙って見つめ合っていた。

「無断でベッドルームを使用して、すまなかった」

名波響は丁寧にお辞儀をし、コカに謝罪した。

コカからの返事はない。彼はただ静かに響を見つめていた。

「.....では失礼する」

踵を返しドアへと向かおうとした響の腕をコカが捕まえた。

「待ちなよ、響。せめてうがいをしていたらどうだい？」

「.....そうしよう」

「はい、うがい薬」

響はうがいをし、鏡を見つめた。鏡に映ったコカが柔らかい笑みを浮かべながら、じっと響を見ている。こういう笑みを浮かべている時は大抵怒っているのだ。響はそう思い、一刻も早く部屋を出たいと思った。

しかし久しぶりの二人きりの時間。

少しでも一緒にいたいという気持ちと、弟・伊藤若葉の元へ戻らなければという葛藤。

「.....うがい薬をありがとう」

「どういたしまして」

「.....では失礼する」

出ようとする響の腕を、再びコカが掴んだ。

「この部屋から出られる.....なんて思ってないよね？」

「あっ！」

コカはひょいっと響を抱き上げると髪の毛にキスをした。そして少し乱暴に彼の体をベッドへと落とす。

ギシッギシッと弾むベッド。その上で響は黙ったまま、コカを見上げた。

「まさか君が、二人で何度も寝た愛の部屋に男を連れ込むだなんて、思ってもみなかったよ」

コカはジャケットを脱ぎ、ネクタイを外した。次々と脱ぎ捨てられていく服。

裸になったコカは響の上に乗った。

美しい裸体を見て、響は頬を染める。鍛えられた白い肉体。盛り上がった胸板に触れたかった。何度も触れた柔らかい胸毛。何度も何度もなんどもキスをした体。

だが向こうの部屋には弟・伊藤若葉がいる。上司の円青樹もいる。コカはライバル会社のエージェントなのだ。響は躊躇した。

ここでコカを挑発してはいけない。

理性的な判断をした響は、彼に頭を下げた。

「すまなかった」

「もっと謝罪してくれなきゃ許さない」

「.....」

「いつもなら悪いコトをした時、あの台詞をすぐ言うのにネ。今日はなかなか言わないな」

「あの台詞……」

「言いなよ、あの台詞。そうしたら許してあげるヨ」

あの台詞。

響は俯いて唇を噛んだ。

ここであの台詞を言えというのか。

子供の頃、ジョンに悪戯をして怒らせた時に言った「あの台詞」。それからジョンが怒った時には一種のゲームのように「あの台詞」を言うようになっていた。

しかし。

弟も上司も参加しているこの旅行中に言うのか。

だが言わないと部屋から出られそうもなかった。

響は少し恐怖を感じながら、瞳を閉じて言った。

「な……なんでもいたします。私になにをしてもかまいません。だからお許し下さい。ジョン」

「ふふっ、よく言えたね。許してあげる、可愛い響」

ジョンは極上の笑みを浮かべ、響の唇にキスをした。

響は革の手錠を嵌められた。両手が動かないようにくっつき、固定される。ベッドボードの間からチャリチャリという音と共に、鎖が伸びてきた。

「新しくベッドに付けておいた遊び道具を早速使う事になるなんて思わなかったよ」

ジョンは響の腕を頭の上に伸ばすと、鎖を手錠の金具に繋いだ。

両手を縛られ横たわる響を、ジョンはゆっくりと見つめた。

「ふうん……結構萌えるね。腕を上げている脇と胸のラインが美しいな」

そしてジョンは響に黒いアイマスクを付けた。

響はこくりっと唾を飲み込む。

「……いつも思うけど、響ってちょっとヘンタイだよね。マスクをするだけで乳首が勃ってくる」

「し、視覚情報を遮られたら皮膚感覚が鋭敏になるのだから当たり前だろ？」

「皮膚感覚って……何も触ってないのに？」

ふふふっとジョンは笑った。

次の瞬間、暗闇から伸びてきた指が、いきなり響の乳首を摘んだ。

「ああっ！」

ぞわっとした快感が響の乳首に集中する。

「触る前から硬くしちゃって」

痛みが強くなっていく。きゅううっと摘み上げられていく乳首。

「あああっ！」

響は体をよじり、悦楽の声を上げた。

「いつもながら美しい声だ。君の声を聞くとぞくぞくするよ」

ジョンが体重を移動させる。

「口を開けなさい」

ジョンの優しい声。その裏に潜む残虐性。

響は悦びを感じながら口を大きく開けた。

「可愛いねえ。雛鳥のようだ。響、餌が欲しいかい？」

暗闇の中からジョンの声が聞こえる。

生暖かいモノが響の頬にピタピタと触れる。

響はこくと頷いた。

「じゃあ、おねだりしてごらん」

優しく、意地悪な言葉。

響はふと、ドアの向こう側にある部屋にいる弟・若葉のことを考えた。

ドアの向こうにある日常。

そして今、暗闇に包まれている非日常。

いや、これは本当に日常ではないのか。

純真な弟が知らない、真面目な兄の〈日常〉なのではないか。

少なくとも学生時代、響にとってこれは〈日常〉だったのだ。

それは愛と輝きに包まれた日々だった。

少しだけ……。

そう響は思った。

少しの時間だけ、若葉の元に帰るのが遅れても大丈夫に違いない。

そう、今、若葉の隣には円青樹がいる。愛しい弟を大事にしてくれる逞しい男が。

だから少しだけ……。

響は少し舌を出しながら、悩ましい声で言った。

「響の口にジョンの太くて長いペニスをください」

「よくできました。ふふっ。まったく、いつもこうやって素直な子ならいいのにネ」

「むぐっ！」

響の喉の奥まで無理矢理入ってくるペニス。

何度もなんども舐め、匂いをかいだモノ。

とても久しぶりで、嬉しくて。

「も、もが、むっ！ ぐっ！」

胸が一杯になる。幸せだと叫びたい。だが響の口は塞がれていた。息が出来ない。喉の奥まで乱暴に差し込まれるペニス。息苦しさの恐怖と、ギリギリの愛が響を興奮させる。

「むごっ……はっ！ はあ……はあ」

ペニスは引き抜かれ、響はやっと息が出来た。

そして。

「ぐっ！ むぐっ！ ぐほっ！」

休む間もなく、またペニスは奥まで入ってきた。無理矢理。力強く。さらなる奥へ。

響の頭がふわふわな枕に埋まる。

「この間ね、財界人の狒々爺が響の口を貸してくれって言ってきたよ。三千万から始まって最終的に一億まで払うって言った。君のフェラチオにはそれだけの価値があるのに、あんな弱々しい青年にサービスしてさ」

ジョンはペニスを引き抜いた。

「ぐはっ！ はあ……はあ……はあ……ぐう！ むぐっぐっ！！」

そして響の濡れた口にまた突っ込む。

「君は自分の価値が分っていないんじゃないか？ その舌で舐められたら、どれだけ男が君に夢中になるかを。その喉に愛撫されたら誰でも虜になるってことを」

ジョンは再び腰を引き、響に新鮮な空気を与えた。

「は、はあ……はあ……はあ……お、お前が口だけにしろって言ったんじゃないか」

「当たり前だろ？ 私の前で他の男とアナルファックをするつもりだったのかい？」

「サンガを引き止めたのはお前……ぐっ！ んー！ むぐっ！ ぐう……う！ うっ！」

再び響はペニスの味を感じる。舌を絡ませる。喉の奥の奥までペニスが力強く侵入していく。

「他の場所で隠れて浮気されるよりいいと思っただけだよ。君がいつもどうやって若葉君に手を出す者達を墮としていたのかというのにも興味があったしね。でも途中から興味は嫉妬に変わってしまった」

「ぐっ！ ぐ！ ううっ！ ……はあ……は、むぐっ！」

「サンガ君が響の髪に触れた時ね、後ろへ手を回すように言うのがあと少し遅れていたら彼を殺してしまうところだったよ。可愛い響が私以外の者にイマラチオさせられているなんて、許せない」

ジョンはさらに奥まで挿入した。

「んんむっ！！ ぐっ！」

「奥の……喉の奥まで私の……物なのに……うっ！」

ジョンが色っぽく顔を顰（しか）めた。

喉の奥へと放たれる大量の精液。

響の体がびくびくんと震える。水着に染みが広がった。

ジョンは響の口から少し腰を引いた。

響の喉がこくりこくりと動く。そしてまだ口の中に残っているジョンのペニスを舐め、ちゅうっと吸った。

離したくない。そう語っているかのように動く響の柔らかい舌。

「相変わらず素晴らしい舌使いだ。黄金の舌を持つ女神の血筋か。味の識別は苦手みたいだけど

、フェラチオに関しては本当に女神の舌だよ。その繊細な動き。まったく君にフェラチオをされると私でさえありえない程の早さで出してしまう」

ジョンは響の足元へと行って、ペニスに触れた。

「ふふっ……イマラチオでこんなに感じるなんてね。水着が濡れているよ。恥ずかしい子だな。縛られて、無理矢理口を犯されて、勃起して射精してさ」

水着が脱がされる。男同士が裸でベッドの上に横たわり触れ合っている。ここに弟が入ってきたらどうやって言い訳をしたらいいのだろうか。響はそう考え、興奮した。弟に見られる。裸の自分を。コカとの行為を。汚れた水着を。

だが伊藤家嫡男の自分がライバル会社のコカと性行為をするなど、大スキャンダルだ。響は縛られ、真っ裸にされ、そんな事を考えていた。

ゆっくりと硬くなっていく響のペニスがそっと撫でられる。

「あ……」

響は甘い吐息を漏らした。

「先程、あさひ君がネ。私と君——若葉君のお兄様——との関係を、若葉君と円君にばらしていたよ」

「え!？」

「もちろん円君は名波響という男が若葉君の兄だとも、伊藤家の嫡男だとも知らないけどネ。この旅行中にいつか誰かがうっかり若葉君達に漏らしてしまうと、あさひ君は思ったのだろう。三鳥井君とかね。私達とあさひ君、三鳥井君、希鈴君はよく一緒に旅行しているし、今更君を私の恋人ではないと扱うのは難しいと思ったのだろう」

「別に私達は恋人同士ではないだろ」

「……その辺りの経緯も彼が若葉君と円君に説明していた。『伊藤君のお兄さんは別れを告げた』と。もちろん私は、お互い今でも愛し合っていると云ったがね」

「……………」

響はごくりと唾を飲み込んだ。

伊藤苑に入社した今では、他社のスパイともいえるジョンと付き合うのは背任行為ともいえるだろう。若葉はどう思ったのだろうか。彼はぎゅっと唇を噛んだ。

「そんなに心配する事はないよ。私に庇護されていなかったら響は今頃狒々爺共の慰み者さ。君はこんなに愛らしくて美しいのだから。実際、何人のセレブ達に君を貸してくれと頼まれたことか。パーティーに行くと誰かしらに言われるんだよ？ 伊藤苑だけの力じゃ彼らの魔の手から君を守れないのは事実だ。若葉君だってもう少し大人になれば気付くだろう」

ペニスがいきなり握られ、響は体をびくんと震わせた。

「あっ……ん」

「色っぽい声だね。もっと聞かせてくれ。円君に響を私の部屋で引き取るよって言ったら断られてしまったからネ。今しか君を抱けないかもしれない」

今しか君を抱けない。

今しか。

響の心がきゅうっと悲しむ。

「ジョン……キスしてくれ」

「響……」

暗闇からふわっとした唇が現われる。響はちゅっ、ちゅっとジョンにキスをした。唇の間から舌が伸びてきて、響の口内を犯す。貪るように、力強く。

その間も響はペニスを弄られ、腰をよじった。いつまでもしてきたい。何時間も何日も。だがそんな日々はもう来ないのだ。

伊藤苑に入社したあの日、二人の幸せだった日々は終わったのだ。

マスクの下に隠れた響の瞳にうっすらと涙が浮かんだ。

「ジョン.....愛してる」

「響.....こういう時だけ、君は素直だね」

「お前と会うのは大抵伊藤苑の社屋内じゃないか。言えるわけないだろ。そもそも勝手に社屋へと入ってくるんじゃない」

「いいじゃない。円君には許されているよ」

「まったくあの人はフリーダムだから」

はあ、と響は溜息を吐いた。

「愛と付き合うは別物だからな」

冷たく言い放つ響に、ジョンがくすりと笑った。

「私達は相思相愛なのに？」

「そうだ」

「愛していると言われ、なんでも言う事を聞くと言われた、こんなにペニスを興奮させた愛する男と私は恋人同士じゃないのか」

「そうだ.....ああっ！」

ペニスをしごかれ、響は腰を跳ねさせた。

「まったく.....強情な男だ。私が欲しくて欲しくてたまらない癖に。そもそも君みたいな淫乱な子がよく真面目に仕事をしていると感心するヨ」

「別に.....あう.....私は淫乱では.....あっ.....ない.....ぞ」

「.....私の経験から言って、君はかなり淫乱なほうだヨ？ 仕事上お付き合いしたセレブ達の中には君ほど私に付き合える者はいないし、パーティーの噂でもそこまで持つ子はあまり聞かない」

「そ、そんなあらぬ噂を流すから、貸せだのなんだの言われるんだろうが！ 私はモノじゃないんだぞ！ .....ああっ！」

「恋人を自慢したくなるのは当然でショ？ さ、足を上げなさい。ローションを塗るよ」

響は真っ赤になって、静かに両足を上げた。

ぬるりっとアナル周辺に冷たい感触が広がる。ぬる、ぬるとアナルがマッサージされる。そしてぬぬっとジョンの太い指が差し込まれた。

「あうっ！」

感じる。弄られていたペニスがさらに興奮した。

指が二本.....そして三本へと増える。

「あ.....あ.....あ.....」

「こんなに感じやすく淫乱じゃない、ねえ……」

「アナルが感じるぐらい普通だろ……ひっ！」

「いやそれ、世間常識では普通じゃないからネ。ゲイだって皆、アナルが感じるわけではない」

その時、アナルににゅにゅにゅとじたジェルの様な感触が広がり響はびくっと震えた。

次の瞬間。

体内に広がる熱さ。痒さ。

響は体をよじって色っぽい声を漏らす。

「あっ、熱い！ 体が熱い！

……ジョン、お前、今、何かを注入しただろ！」

「旅行用に作った響ブレンドをネ」

「な、な、な、何をするんだ！ この旅行には若葉も円さんもいるんだぞ！ ああっ！」

「そろそろ若葉君の過保護から卒業しなさい。あの子はもう円君の恋人なのだから」

ジョンの指が響の感じやすい場所を執拗に攻める。

「……分って……いる！ ……あっ、あっ！ ああああ——！！」

ジョンが響のペニスを啜えた瞬間、頂点に達し、爆発した。

「美味しい。響のスペルマは最高だ。ところでサンガ君にはフェラチオをさせたのかい？」

「……や、やめて……そこを舐め……ないで……感じ……過ぎる……」

「どっちなんだい？」

前立腺をいやらしくマッサージされ、響は悲鳴をあげた。

「いやあああ！ やらせた、やらせた！ く、啜えさせて頭を押さえてガンガンペニスを突っ込んで、泣き叫ぶあいつの口の中へ……やあああ！！」

「もうしませんは？」

「もうしません！ もうしませんから、許して！ 許して！ おかしくなっちゃう！ 体がおかしくなっちゃう！ 頭がトンじゃう！ 酷い！ 酷いよ、ジョン！ 若葉が……いるのに！！」

「……愛の部屋に黙って間男を連れ込んで、レイプしようとしてサ……酷いのはどっちだ」

ジョンが体を引いて指を抜いた。

「ああん！」

指が抜かれたということは……。

響はさらなる快感を妄想した。あの享樂の時間が来るのだと。

いつも泊まりの時にジョンが特別なローションを使うのはよくあった。

一晩中愛し合っていた日々。いや、二晩も、一週間も。ただただ二人は愛し合っていた。

次からつぎへと湧き上がる快感。脳が真っ白になるような。愛で一杯になるような。

だが今回の旅行には弟も上司も同行している。そんなセックスに溺れるわけにはいかない。

しかし。

響の体は求めていた。

指が抜かれるだけで体中を走る電流のような気持ちよさ。

アナルがひくひくと身悶えし、ジョンのペニスを待ちわびているのが自分でもわかる。

ジョンは響に触れず、黙っていた。

恐らく響のアナルをじっと見ながら、待っているのだろう。

響がいつも言う台詞を。

「あ……あの……」

両足を上げ、アナルをひくひくとさせながら、響は甘い声で言った。

「ジョン……あの……あ、あの……お願い……お願い……意地悪をしないで……お願い……」

暗闇は静かなままだ。

響は頬を染め、俯いた。そして恥ずかしそうにいつも言う台詞を小さな声で言った。

「お願い……します。ジョン、響のア、アナルを犯して……ください」

墮ちていく自分を恥じ、響は瞳に涙を浮かべた。

「よく言えたネ。ご褒美をあげるよ」

「あ……ああ」

アナルに暖かいペニスが触れる。それだけで響はびくんっと体を震わせた。

広がる。広がっていく。体が……。

「いいかい？ 響。若葉君が同行しているこの旅行で、快感を選んだのは君だよ」

広がっていく。

「ああああ……」

ゆっくり、ゆっくりと太いカリが響を広げていった。大きく……大きく……。

息が止まる。快感で脳が沸騰する。

一番広がった所で、ジョンが手を止めた。

「い、いや……壊れる……ジョン……頭が……」

響の体がびくんびくんびくんと大きく波打った。腰を動かし快感から逃れようとしても力強く腰を押さえ付けられていて、アナルは最大まで広げられたままだった。

「……可愛いなあ。体がピンク色に染まって美しいよ。この快感に震える響の姿は最高だ。いつか若葉君にも見せてあげたいネ」

「止めて……若葉には……見せないで」

「真面目なお兄様像を壊したくないのかい？ 今、ここで呼ぶことだって出来るんだヨ？」

「ジョン……こ、壊れ……ちやう……アナル……壊れちやう……息が……」

「悦楽に震えて涎を垂らす響お兄様の姿を見せる絶好のチャンスなのに。ふふふっ」

巨大でぬるっとした力強い快感に、響の体は引き裂かれた。

「やああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

「もっと声をあげなさい。若葉君にも聞こえるようにネ」

壊れる。

体が。細胞が。アナルが。

脳が。感覚が。神経が。

全てが。

いつも以上に感じるアナル。

何度も押し寄せるドライオーガズム。

ジョンの体が覆い被さっている。汗の感触。荒れた呼吸。彼が前後するたびに押し寄せるフラッシュ。

「あああああ！！ ジョンが！ ジョンのペニスが！！ 狂わせる！ 私をくるわ……！ 狂っちゃう！ ダメ！ もうおかしく……！！ ああ、あああ、ジョン！」

「狂えばいいよ。全てを捨てて私のモノになりなさい。もう名前も、家も、弟も、全て捨てて、私だけの響になればいい。いっそ壊れてしまえばいい。そして一生私の男になればいい。もう君を離したくない。離したくないよ、響」

「愛してる！ 愛してる、ジョン！ 離さないで！ もう離さないで！ 一人にしないで！ 一緒にいたい！ 貴方と！ 一緒に……結ばれたい……貴方と……あああっ！！」

「愛してるよ、響」

ジョンはどくんっと、響の体内に射精した。

ゆっくりとマスクが外される。ぐしゃぐしゃに濡れた響の可憐な瞳。流れる宝石のような涙。

ジョンはゆっくりと涙を舌で拭った。

「ジョン……好き……」

「知ってる」

「愛してる。愛し……て……？ な、なんか……体がまた……変？」

「今回の響ブレンドは我が社の総力を挙げて作った一級品で、私の精液が混ざるとさらに快感が増幅するように作られている。ちなみに効果は48時間続くヨ」

「な、何を……お前……わ、若葉も……円さんもいる……旅行に……なんてモノを……あっ、ああ……」

響の体がびくんびくんと跳ねる。

「効果は一応徐々に弱まっていく。君が誰かと悪さをしなければ大した問題じゃない。しかし誰かに触れられたりすると、感覚が鋭敏になっているから恥ずかしい目に遭うヨ。勃起するのは当たり前。下手したら道端で射精しちゃったりネ。恥ずかしがり屋さんの名波ちゃんはその屈辱に耐えられるカナ？」

「ひ、酷い……あ、ああ……またジョンが大きく……なっていく……広がって……」

「何度もなんども種付けして、もっともっと狂わせてあげるよ。もう君が誰にも触られたくないって思うまでネ」

「ああ……ダメ……狂って……いく……」

「私が護ってあげるよ、響。一生、ずっと、永遠に」

次の瞬間、響はジョンに力強く貫かれ、さらにぐるりと体を反転させられ、俯せになった。アナルが一杯に広がりながらぬるぬると動き、竜巻のような強い快感が響を襲った。彼は天国に

響く鐘の音にも似た悲鳴を上げるのだった。

響が目覚めると、飛行機はいつしか目的地に着いていた。

「しまった！」

慌ててベッドから飛び降りようとする響をジョンが後ろから抱いて止めた。

「大丈夫だよ。若葉君達に名波ちゃんは疲れて寝ているって伝えてあるから」

「.....そうか」

響は落ち着きを取り戻し、ことんとジョンに寄りかかった。

もう夢のような時間は終わったのだ。

この暖かい温もりを感じ続けるわけにはいかない。

伊藤家嫡男としての、伊藤苑社員・名波響としての時間が始まる。

響は少しでもジョンと一緒にいらればいいのにと考えた。だがこれはシンデレラのような一時の幻に過ぎない。それを誰よりも名波響は知っていた。

「あ.....水着」

「新しいのを用意してあるから、そちらを穿いていくといい」

「ありがとう」

そう言って響はジョンにキスをした。

ぴくんと体を震わせ、響はジョンから離れる。

「.....おい、あのジェルの効果、まだ続いているぞ」

「48時間続くって言ったでショ？」

「まったく.....今日は若葉も一緒に来ているっていうのに。こういう日は特別なジェルを使うなよ。まあ、自制心を持っていれば、なんとかかなりそうだ」

「そうそう、自制心を持っていれば大丈夫だよ。普通の生活を送っていればネ」

ジョンは意地悪そうににやりと笑った。

響は窓の外を見た。仲良く歩く若葉と円青樹の姿が見える。そして浜辺でくつろぐ世界各国のセレブ達。

「.....ん？ R先輩とバッティングしてるのか。あの人、苦手なんだよな」

「響はRのお気に入りだからねえ。まあ気に入られていて損はないよ。適当にあしらっておくといい」

「適当にって.....軽く言うけど、お断りするのは大変なんだぞ。ジョンがいないと大胆に迫ってくるし.....誰も助けてくれないし.....」

「ふふふっ、頑張れ、可愛い響ちゃん」

響は水着を穿いた。

恥ずかしくなる程、まだ体が興奮している。彼は頬を染め、俯いた。

「.....なあ、水着でいかないとダメか？」

「ビーチにスーツで行くわけには行かないだろう？ 若葉君が待っているよ。早くお行き」

「え？ ジョンと一緒に来てくれないのか？」

「ああ。私はしばらくビーチを歩く君を見物しているよ」

ジョンはにやりと笑い、窓から外を見た。

「フェロモンを撒きながら彼らの中を歩く君の姿が見てみたくてね」

「この……変態サド男が」

「んふふふっ、さっきも言ったけど触られ過ぎると興奮の暴走が止まらなくなるから気を付けてネ。公衆の面前で恥ずかしい姿を晒すことになるヨ」

ジョンは響の乳首をきゅっと摘んだ。

「あっ！ あっああっ！ 止め……！！」

「ずっと乳首を勃起させちゃって。私が行くまで我慢するんだよ、愛しい響」

ジョンの手がずっと、響の水着へと滑り込む。

「もう……止めろって……ああっ！ あんっ！ それ以上されると……あっ！ また！」

どくんっと白い精液がジョンの掌へと放たれた。

ジョンは精液をぬるぬるっと響の体に塗った。そのまま乳首をぬめぬめと刺激する。

「私のスペルマと響のスペルマが君の体の上でミックスされていていい感じだ。興奮を呼び起こすような薫りがするネ」

響はぼんやりと宙を見つめながら、体をびくん、びくん、と震わせた。

「綺麗だよ、響。私の男だ。私だけの男だよ。だからもう誰にも触れるな。誰にも触れられるな。私だけの男だって、覚えておくんだよ」

ジョンは響の首筋にキスをした。

響はこくんっと頷く。

「さあ、お行き。みんなの所へ」

ジョンがそっと背中を押す。

シンデレラの鐘の音が鳴る。

響はうっすらと涙を浮かべながら、再び頷き、立ち上がり、扉へと向かうのだった。

飛行機を降りて赤い絨毯の上を歩く名波響。

その艶っぽい姿はビーチにいるセレブ達を魅了した。頬を染めながら見つめる者。ヒソヒソと噂話をする者。にやにやと笑いながらビデオを回す者もいた。

立って歩いてみると腰や体中が痛く、辛い。響は少しふらつき、顔を顰（しか）めた。

そこへモデルや財界人、また富豪のご婦人達が歩いてきた。無視するわけにはいかない。かといってこのレッドカーペットから出たら拉致されかねない。響は絨毯の端に立ち、ご婦人達を迎えた。

「響、お久しぶりね」

「ハイ、響」

「どうしたの？ また悩ましい姿をして」

「奥様ったら.....知っていらっしゃる癖に。ジョンにまた意地悪されたのよねえ。可哀想だわ」

「桜色の乳首をこんなに興奮させながら歩いているなんて。一体今までジョンに何をされていたのかしら」

ほほほほっと婦人達が笑う。

「今夜は私のベッドにいらっしやいよ」

「あら、抜け駆けはいけないわ。響、私の別荘にいらっしやい。夫も貴方と寝たがっているのよ」

「貴方のペニス、本当に素敵。味わってみたいわ」

「水着はいいわね。ラインがくっきりと見えてよ」

婦人達は次々と響にキスをし、体中に触れてくる。しかし決して絨毯の内側には入ってこないのだった。

響は醜態を晒す前に離れようと思い、すぐにお辞儀をし、若葉達の元へと向かった。

「響、久しぶりだな」

遠くから声がある。Rの声だ。桁違いのセレブリティ。会いたくなかったが無視することは絶対に出来ない。

声がした瞬間、響はRへと体の向きを変え、深々とお辞儀をするのだった。

「R先輩、ご無沙汰しております」

「いいよ、そんなよそよそしくしないでくれ。私と響の仲じゃないか」

どういう仲なのだ。そう響は思ったが笑顔を絶やさなかった。

「お会い出来て光栄で.....むぐっ！」

響はいきなりRに抱かれ、激しいキスをされた。彼は必死になって赤い絨毯から出ないように踏ん張った。しかし体格差がありすぎる。ひょいと持ち上げられたら簡単にはみ出してしまうだろう。

だが絨毯の上から響や客人を拉致することをジョンが許さないのをRも知っていた。

ライン上の攻防。

口の中へと無理矢理入ってくるRの舌。太く長く、奥の奥まで犯されていく。響は多少抵抗するが、どの程度の抵抗までが許されるのか分らず、悩んだ。冷や汗が出る。少しでも不快な気持ちにしたら、明日にでも伊藤苑は無くなるだろう。ジョンではない男の舌を受け入れながら、響はそんな事を考えていた。

緊張し、冷や汗が流れていた響の背中にRの手がつつつと触れる。

響は情けないことにびくっと体を震わせ、反応してしまった。

――しまった！

後悔しても遅かった。

にやりと笑ったRは響の背中を撫でる。それから力強い左手の指でがっしりと体を押しえた。右手の太い指先が硬くなった乳首に触れる。感じやすい響の、さらに特別なジェルによって敏感になったピンク色の乳首を舐る。

「……R先輩、あの……」

「なに？ 響」

乳首に触れないでください。この一言が出なかった。響は唾と一緒に言葉を飲み込んだ。

体がますます反応していく。響は興奮する体を止めることが出来なかった。肌がさあっと桜色へと染まっていく。ビーチからは感嘆の声が上がった。

「綺麗だね。本当に美しいよ、響。

水着姿の君が一人で歩くななんて初めてのことにじゃないか？ いつもジョンが君を側に置いて護っているのにさ。彼を怒らせてでもしたのかね？ 辛いことがあったらいつでも私の元へおいで。大切にしてくれるよ。

君の肌は興奮すると桜色に染まってとても美しいと聞いていたが、本当なんだね。興奮しやすく感じてやすく……とても淫乱な子なんだって？ 私のテクニックでどこまで乱れてくれるのか、楽しみだよ」

背中に回ったRの左手が響の尻に触れ、撫で回す。繊細な谷間を上下し、水着越しにアナルをマッサージしてくる。

「あっ！ 先輩……！ その……」

体中に走る快感と響は闘っていた。ここで少しでも身を振ったら、Rが何をするか分らなかった。下手をすればジョンとの全面戦争覚悟で響を連れ去るかもしれない。響は唇をぎゅっと噛み締めながら、体中に湧き上がる快感を我慢した。

「なんだい？ 素直になって言ってごらん」

Rは響の水着をそっと下ろそうとした。ずり落ちた水着が膨らんだペニスに引っかかる。響は真っ赤になりながら水着を押しえた。

男の逞しい右手が響の肌を優しく舐りながら、水着の膨らみに触れる。

「君のペニスに水着上から触れる日が来るとはな。夢みたいだよ」

Rは響の膨らんだペニスを指先でなぞり、形を際立たせた。

「日本人にしては大きいね。感度はどうかな？」

「先輩！そこは……！」

水着の中にRの大きな右手が滑り込んできた。同時に左手がやはり水着の中へと滑り込んできて、アナルを直に撫で回す。長く太い男の中指が、ジョンの精子とジェルが零れ、濡れているアナルの中へとぬぬっと滑り込んでくる。

「あっ……ん……」

響はたまらなくなり、艶っぽい声をあげ、体をふるふるっと震わせた。

——人前でここまでするだなんて……R先輩、酷い……。ジョン……助けて……。

響はうっすらと涙を浮かべた。

助けは来ない。

「素晴らしいね。君の喘ぎ声はなんて美しいのだろう。東洋の神秘ってやつなのかな」

セレブ達の視線が集まる。綺麗な顔と冷たく笑った表情。どこまでRが手を出すか賭けに興じる者もいた。

「せ、先輩……」

「たまらないね……その瞳」

Rはごくりと唾を飲み込んだ。

「響はその姿を自分で見たことがあるのかい？ 男を誘惑している濡れた瞳。唇。声色。体……そして匂い。

ふん、ジョンにスペルマを塗られまくったな。シャワーも浴びせさせずにこの姿のまま人前へ出すなんてね。あいつもよくやるよ」

響はそっとRの体を押した。だがそんな力ではびくともしなかった。

「可愛いねえ。私に抱かれて嫌がる仕草をしたのは君が初めてだよ。そうか、成程。これが抵抗ってやつか。これはいい。確かにいいな。ジョンもこれでは君に夢中な筈だ。ふふふっ、私達のような男に抱かれて抵抗する者などいないからな」

Rは響に体を密着させ、耳元で囁いた。

「君を連れて帰りたいよ、響。もう一步、こちらへおいで。その赤い絨毯の外へ」

水着の中のペニスが優しく揉まれた。響の体がびくびくっと震える。

Rは優しく微笑みながら、興奮し濡れた響のペニスを水着から出そうとした。

——助けて……ジョン。

響の頬をダイヤモンドのような涙が輝きを放ちながら流れた。

ブログ『伊藤君と円先輩』 1 1 9 本目に続く <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-134.html>

こんにちは。藤間紫苑（ふじま しおん）です。

『伊藤君と円先輩』サイドストーリー、いかがでしたでしょうか。

ブログには書かれていない名波×サンガ、コカ×名波を電子書籍化してみました。

ブログには書かれていないシーンが沢山あります。

サンガが一体何故名波を恐れているのか、とか。

コカと名波の出会いとか。これは一応、現在『伊藤君と円先輩』電子書籍化書き下ろし小説として執筆中です。

刊行案内は『伊藤君と円先輩』公式ブログ <http://drink110.blog29.fc2.com/> もしくは藤間紫苑  
ツイッター <https://twitter.com/#!/fujima77> にUPしますので、チェックをよろしくお願ひします

。

学生時代。ある事件に巻き込まれた名波。それを偶然助けたコカ。

そこから二人の付き合いは始まります。

ブログの『伊藤君と円先輩』はほのエロシーンのみとなっておりますが、電子書籍、また書籍の  
イトマドにはエロシーンが含まれます。

大人のイトマドとして楽しんでいただければ幸いです。

表紙立絵イラストは書籍同様・石原理先生の作品となります。

いつもお世話になっております。

★ 石原理公式サイト <http://www.denpajack.net/>

この作品はPDFやePUB拡張子でもダウンロード出来ます。

スマホを持っている方、PCに保存したい方はぜひダウンロードをしてみてください。

ではこれからも応援をよろしくお願ひします。

藤間紫苑 2011/01/20

藤間紫苑公式サイト <http://www.fujimashion.com/>

## コカアディクション 2 ～ベルガモットに魅せられて～ 序章

---

『コカアディクション 2 ～ベルガモットに魅せられて～』

この小説は 愛と潤いのドリンク劇場『伊藤君と円先輩』▼147本目『西瓜ソーダ 4』（N: 藤間しおん I:石原理） <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-164.html> の続きとなります。

古河・C・ジョン（愛称 コカ）の別荘へと遊びに来ている伊藤苑三人組。

海水浴を満喫した後、ドリンク業界のライバル会社エージェント達と共に大浴場へと向かうのだった。

伊藤苑創業者一族の御曹子である伊藤若葉が脱衣場の扉を開くと、そこにもやはり赤い絨毯が敷き詰められていた。

「……脱衣場も赤い絨毯付きなんですか」

「もちろんだとも！ 私は絨毯の上しか歩いたことがないからネ☆」

ジョンが踊りながら脱衣場に入る。

「皆で風呂に……入るのか……」

伊藤苑研究員助手（年度契約アルバイト）である名波響がぼそりと呟いた。

響と若葉は実の兄弟であった。響は伊藤苑次期社長としての期待を背負って子供の頃から教育されていたが、伊藤苑社内では最重要極秘事項になっており、それを伊藤苑研究室室長である円青樹すら知らなかった。

伊藤若葉も社内では一社員に過ぎない。実力主義の伊藤家は創業者一族である事実を公表することはせず、一社員として実力をつけ、管理職へ登り詰めるよう教育していた。だが円は若葉が伊藤家の御曹子である事実を知っていたのだった。

「名波さん、ちょっと恥ずかしがり屋ですものね。円先輩を見習ってバツといきましょうよ」

「伊藤君、変な所が円さんに似てきたなあ」

頬を染めながら響が若葉を見る。

「恋人ですから」

若葉はちょっと自慢そうに微笑んだ。

「そうだぞ、名波。恥ずかしがるより、堂々としたほうが開放感があって楽しいぜ」

円青樹が響に笑いかけた。

「開放感……ですか」

響はゆっくりと脱衣場を見渡した。

瑞々しく弾けるように美しい男達が談笑しながら水着を脱ぐ。すらっとした脚。引き締まった尻。そしてペニスが響の視界に飛び込んできた。

どくん。

（あ……また体が……）

響は慌てて俯いた。

飛行機の中でジョンに使われた媚薬のような特製ローション。それはジョンの精子と混ざることによって、一層高い効果をもたらすよう開発されていた。何度も繰り返しジョンに種付けされた響は、元々感じやすい体をさらに興奮するよう改良されていた。

そんな響にとって大浴場に集う美しい男達の体は目の毒でしかなかった。鼓動が早くなる。うっすらと極めて細かい真珠のような汗が浮かぶ。熱くなっていく下半身。響は興奮する自分自身を恥ずかしく思い、唇を噛んだ。

「うわ～、名波さんの肌、ピンク色に輝いて綺麗！」

牧歌れもんが驚きの声をあげた。皆の視線が頬を染め俯く響に集まる。

響はびくんっと体を震わせた。

「これが東洋のピンクパールと呼ばれてる所以（ゆえん）なんだ～。近くで見ると凄い！ 正直、ボク、この目で見るとマル秘レポートに書かれた名波さんの噂が信じられませんでしたよ～。10ページにも渡って名波さんの渾名（あだな）が書かれていて、なんだこりやって思いましたもん」

れもんが響の肌をじっと見た。

「くだらない調査報告書を作成する暇があったら、もっと仕事をしろと君の部下に伝えておけ」

響は赤くなりながら、少し呆れた声で言った。

「僕も今回の旅行で初めて見ました。名波さんってきちんとなさっていて、あまり隙を見せない方なのに珍しいです」

朝比奈三也（あさひな みつなり 愛称あさひ）が不思議そうに響を見る。

「俺は何度か見た事があるけど、そういう時って大抵何かのプレイ中だ。最初はなんで円さんもいるこの旅行中にそんな目にあっているのか分らなかったんだが.....きっと名波がサンガ君に手を出したのがバレてコカに折檻されたとかそんな感じだろ」

三鳥井がにやにや笑いながら、響を嘗（な）めるように見た。

「お、お前は何を言っているんだ」

響が慌てふためきながら三鳥井を睨んだ。

「あはは、凶星か」

「なんです、その話」

大同夢彦が興味津々な顔をして周りを見渡す。

「名波さんがね～、飛行機の中でサンガ君に悪戯してたらコカさんが来てね～、二人にサンガ君が弄（もてあそ）ばれたんだって！

ボク、サンガ君から直接聞いちゃった！」

れもんがきらきら目を輝かせながら言った。

「うわ～、凄い萌えシーンですね。後でサンガ君から詳しく聞こう」

大同が水着を脱ぎながら言った。

「その話、俺も聞きたい」

円がにやにや笑いながら響を見た。

「.....興味があるのでしたら、今夜お話しますよ。別に大したネタじゃありませんけどね」

響がちらっと円を見る。目に飛び込んでくる円青樹の漢らしいペニス。ごくりっと喉を鳴らし、響は慌てて目を伏せた。

「ほおっ.....。それにしても凄いですねえ。肌がピンク色に輝いて、まるでベルガモットの華みたいだ。円さんは綺麗所をお持ちで羨ましいですなあ」

大同が感嘆の声をあげる。

「何度も一緒に出張へと行ってるが、俺もこんな名波は初めてみたよ。不思議な肌の色だな」

「『性的に興奮すると肌がピンク色に輝く』って報告を受けたんだけど……名波さんって、今、コーフンしてるんだあ」

れもんが意地悪そうに笑った。

「れもん君、名波響のコト、よく知ってるっスね」

サンガが感心した表情でれもんを見る。

「そういうのがボクらエージェントの仕事でしょ？ サンガ君」

「え？ そうなんスか！？ 自分、いまいち仕事の内容、分ってないっス」

「まあ、れもん君は札幌家の養子になったから情報量が違うよね。ぼくも名波さんの情報なんて、伊藤苑研究員助手ってことぐらいしか知りませんよ」

「え？ 大同さんもそうなの！？ あ〜、でもさ、ボクも名波さんのことを知ったの、つい最近だもんね。札幌家の養子になってからだよ。やっぱり札幌家と牧歌家の情報量は大分違ってた。そもそも牧歌家には一研究員助手の素性を調べるほど予算はなかったしね。さらにわざわざ調べ上げた結果が、たかだか渾名の羅列でしょ？ 札幌家も予算使ってなにやってんだよって思ったんだけど、先程、R氏と親しい名波さんを見てその重要性がわったカンジ！」

「名波は別にR先輩やセレブ達を体で籠絡していたわけじゃないぜ。こいつの肌がピンクに輝いている時なんて、俺だってコカの私室でしか見たことがないしな。だから東洋のピンクパールだなんて『噂』でしかないんだよ。れもん君の部下は噂が気になって仕方がなかつただけだろう。今日はこいつ、普段と違ってちょっと様子がおかしいから……余程の事があったんだろうな」

三鳥井が響のピンクに染まった背中を見る。

「あ.....あの.....すいません.....俺達が.....無断でコカさんのベッドルームを借りてしまったからツスカね」

サンガがしょぼんっと俯く。

一同がぎょっとして響を見た。

リクライニングチェアに座るジョンがにやりっと笑う。

響はまずそんな表情をして、唾を飲み込んだ。

「あ.....コカ、すまん。うちの名波が迷惑をかけた」

円がジョンに深々と頭を下げた。

「ご、ごめんなさい.....コカさん.....」

若葉が声を震わせてジョンに詫げる。

「別に君達が謝る必要はないヨ。元々名波ちゃんにはうちのどんな部屋へも自由に出入りしていいと伝えてあったし、彼には十分謝罪をしてもらった。ねえ、名波ちゃん」

ジョンは響に優しく微笑みかけた。

「ああ.....。本当にすまなかった」

響が暗い声で呟いた。

「そりゃあ.....コカが怒るはずだ。名波の様子が変わるのも理解出来たぜ。いわゆる羞恥プレイってやつか。お陰で俺は色っぽい響ちゃんを近くでずーっと見られてお得な感じだけだな。瞳は潤んで物欲しげだし、乳首はつんつと勃起しっぱなしだし、興奮して肌はすぐ艶やかに染まるし、ペニスは半勃起状態。あまりの色気に魅了されて、俺も勃起しっぱなしだよ」

「そ、そんないやらしい目で見るとなよ、三鳥井」

響はぴくんっと体を震わせて、ちらっと三鳥井を見た。そしてどうしても彼のペニスに目がいつってしまう。太く長く硬く勃起したペニス。あれをそっと触って、舐めて、啜えて.....。そこまで想像し、響は真っ赤になって視線を逸らした。

「お前だって今、めちゃくちゃエロい目で俺の一物を見ただろうが。.....舐めたくなくなったのか？」

三鳥井がにやにやと笑って、自分のペニスを握りぶんぶんと振る。

「それとも入れられたくなったとか？」

「ば、ば、ば、馬鹿なことを言うな！ まったく円さんや伊藤君がいる前で、下品な奴だな」

「いや、名波、別に俺のことは気にしないでいいぞ。今日はオフだしな。名波と三鳥井がそんなに仲が良かったなんて知らなかったから、少し驚いたが」

「ちょっと待ってください、円さん、誤解です。私と三鳥井は友人ですが、別に肉体関係を持ったことなどありませんよ」

「これから持つ予定だろ？ ここを響ちゃんが鎮めてくれるんだよな」

三鳥井がにやにやと笑いながらペニスを振る。

「お前も調子に乗るなよ、三鳥井」

「欲しいくせに。さっきからお前が俺のペニスを盗み見ているの、知っているんだぜ？」

「そりゃあお前に限らず、見てるだけだ。こんだけハンサムな男達に囲まれているんだから当たり前だろ。例えば可愛らしいれもん君の一物がとてもレモンに似てるとかな」

「ひっど〜！ 人がちょ〜気にしていることを！ 鬼！ 悪魔！ 名波さんの意地悪！」

れもんが抗議すると、響があははと笑った。

そう、冗談を言っていれば気が紛れる。体の興奮も徐々に治まっていくだろう。そう響は思ったかった。

しかし。

暖かい蒸気と共に薫ってくる男達の興奮した匂い。髪の毛に、耳に、頬に、うなじに、肩に、背中に、腕に、腰に、尻に、腿に、足首に絡み付いてくる野獣のような視線。

早く水着を脱げとせかすような圧力。

男しかいない更衣室や脱衣場ではいつもそうだ。遠慮せず、性欲を隠すことをせず、何人もの男達がいやらしい視線を向けてくる。ペニスを勃起させ性欲をアピールしてくる。視姦という言葉が響の脳裏に浮かぶ。

響はごくりっと唾を飲み込んだ。

ばっと脱げばいい。恥ずかしがったら負けだ。

だがどうしても水着を脱ぐことが出来なかった。

タオルを巻いたらどうだろう。だが愛らしい弟が堂々と性器を見せて立っている今、兄の自分がタオルで隠すのも変な感じがした。

——これ以上、円室長や若葉を待たせるわけにはいかない。

響は羞恥心に体を震わせながら、水着に手をかけた。そしてゆっくりと下ろす。手がぷるぷると震える。

前屈みになった響は一層体をピンク色に染めた。恥ずかしさが体中を駆け巡る。勃起したペニスが硬さを増す。先端から先走る淫水が漏れる。その恥辱を隠すような仕草をしたのだが、逆に桃色に染まった可憐な尻を皆の前に突きだし、愛らしい小さな艶やかな蕾を曝け出してしまっていた。

ジョンに特別なローションを注入され、何度も種付けされた響のアナル。

その後の腸内洗浄は許されず、響はきゅっとアナルを自らの意志で閉じるしかなかった。油断をし、性的な興奮を覚えるとすぐに腸内は熱く燃え、アナルから白い愛液が漏れ、水着を濡らし続けていた。水着の内側は汚れ、彼が水着を脱ぐと、小さな蕾からつうっと透明な粘液が零れ、水着との間にきらきらと輝く細い糸を引いた。

「ほう……美しいですね……」

素直な大同が響の麗しさを賞美した。

あさひは蛇のように妖しく瞳を輝かしながら響を見る。そしてごくりっと喉を鳴らした。

サンガは瞳を潤ませ、真っ赤になりながら、もう手が届かない憧れの人を見た。

優しい笑みを浮かべるジョンはリクライニングチェアに座りながら、マッサージ師達に肩や脚や腕を揉ませていた。

響は片方の足を上げ、水着を脱ぐ。あと少しだ。緊張がほぐれた瞬間、彼はついうっかり弟の若葉を見てしまった。

——あ……。

若葉は顔を真っ赤に染めながら、兄である響を見つめていた。その若々しいペニスは勃起し脈動し、物欲しそうに天を仰いでいた。

——若葉が私を見て興奮している……？

何度も見たことがある愛らしい弟の興奮したペニス。それは家の風呂場でおどけて精液のかけっこをした時だけではなかった。

風が怖いと泣く弟と添い寝するようになったある日。響は寝ている若葉を抱き締めていた。長期休暇のたびに会う弟はいつも数ヶ月前より愛らしく、麗しく育っていた。第二次成長期を迎えた弟は誰よりも美しかった。若芽のような芳しい薫り。シルクのような柔らかい髪。新緑のような吐息。風に震え、雷の音に悲鳴をあげ、涙で濡れる睫毛。そんな弟が、兄である自分の腕の中で安心しきっている。安らかな寝息をたてて、響の胸に顔を埋め、眠っていた。

——いつからだろうか。そんな若葉に情欲を抱くようになってしまったのは。

響は何度も自問自答した。愛らしい弟を自分のものにしたいという独占欲。それが性欲に変わったのはいつからだろうか、と。

夏休みの夜。外は台風が吹き荒れ、窓を揺らしていた。そんな中、弟・若葉の部屋へと響は向かった。久しぶりに会った弟は以前と変わらず部屋の中で涙を浮かべながら蒲団を被っていた。ベッドの中に滑り込み、弟を抱き締める兄。震えながら兄にしがみついた弟。

響は胸の高鳴りを押さえながら、若葉を抱き締めた。

小さかった弟が、いつしか射精を覚えた。

小さかった愛らしい弟が美しい青年へと変化していく。

誰にも渡したくない。そんな気持ちがどんどん募っていった。歪んだ愛だとわかっていても、気持ちを止めることが出来なかった。

若葉が誰かに好意を持たれることが許せなかった。愛しい弟が誰かと付き合うと、すぐにカッとして、相手を奪った。弟との仲を引き裂いた。そして屈辱を与え、ゴミのように捨てた。

そんな日々が続いたある夜。

若葉はいつものように安心しきって響の腕に包まれて眠っていた。

外は台風が吹き荒れ、雨が窓を叩いていた。

蒲団に充満する新緑の薫り。そして響が漏らす漢の匂い。寝ている若葉のペニスに、そっと自分のペニスを重ね、響はオナニーをしていた。

雷が鳴る。雨音が激しくなる。

そんな夜。

響は我慢出来なくなり、若葉をそっと腕から下ろし、蒲団の中へと潜った。

そして弟のペニスを探る。まだ寝ている膨らみをそっと寝間着から出し、口に含んだ。

「ん……」

若葉が小さく喘ぎ、腰を動かす。響は体をびくっと震わせ、ペニスから口を離した。しかし弟はそのまま優しい寝息をたてながら眠ったままだった。

響は再び、若葉のペニスを舐めた。くんくんと匂いを嗅いだ。まだ少年の薫りがする。舐めると寝ていたペニスは若者らしく直ぐ様反応し、みるみる硬くなった。

響はあまり音をたてないように口に含み、味わった。舌をぬるぬると動かし、愛しい弟のペニスに絡ませる。味わう。先っぽから漏れる愛液を舐めた。

あの時の幸せを響は一生忘れないだろう。興奮した弟が漏らしたラブジュースが舌の上に垂れる。もっと欲しい。もっと、もっと。

兄弟で悪ふざけをし、飲んだ精液ではなく、自分の手によって弟のペニスを興奮させ舐めた先走り汁。

響は悦びに体を震わせ、さらに若葉のペニスを弄り、勃起させた。

「……ん……あ……」

寝ている弟が静かに喘ぐ。だからといって起きる様子はなかった。なにか淫猥な夢を見ているのかもしれない。

響は静かに若葉のペニスをしゃぶりながら、その声を聞いた。

「……ああ……」

若葉はこんなにも色っぽい声をあげるのだと知り、響は体を震わせた。誰かと寝る時もこのような声を出して、相手を誘惑するのだろうか。そう考えただけで響の胸は嫉妬に燃えた。

若葉への想いは響の舌使いを一層激しくさせた。男が気持ちいい場所を彼は舐めた。啜えた。すると弟の体が益々緊張し始めた。

愛しい若葉が震える。そしてペニスが膨張する。響は硬くなったペニスを喉の奥へと啜えた。

若葉の興奮は弾け、響の口内へと噴出した。

響はちゅううっと吸い、綺麗に舐め取ると急いで寝間着を元に戻し、蒲団から顔を出すのだった。そして再び、若葉をそっと抱き締めた。

「……あ……」

若葉がうっすらと目を開ける。そしてはっとし、ズボンの前を押さえた。

響は目を閉じたまま、寝たふりをした。

「あ、あれ……？ あ、大丈夫？ ……かな？」

若葉は赤面しながら、もぞもぞとズボンの中を触り、ほっとした。

響は寝たふりをしながら、若葉の様子を伺う。

若葉は薄いライトの中、じっと響の顔を見ているようだった。そして暫くすると響の頬に自分の頬をすりすり合わせ、そっとキスをして眠りに落ちてしまった。

響はそんな弟への愛がまた深まり、ペニスを硬くするのだった。

脱衣場で若葉と視線を絡ませ、まるで弟への秘めた愛欲が見透かされているように響は感じた。

体がカッと熱くなった。腸の中へと注入された特別仕様のローションが響の脳を刺激する。ジョンの精液と混ざり合い、いやらしい兄の情欲を加速させる。

前屈みになったまま、響はびくっと体を震わせた。若葉から目が離せない。弟の興奮したペニスが見え隠れした思い出をフラッシュバックさせる。

響の体がぱあっと鮮やかに輝き、甘い蕩けるような薫りが脱衣場に広がった。小さな恥ずかしがり屋の蕾がぶるぶると震え、中から艶めく愛液が溢れてきた。

その姿、匂いを嗅いだ雄達は、猛獣のように性欲を昂ぶらせた。

そして.....。

「あっ.....！」

響のつるつるした桜色の尻に三鳥井が触れた。

手がすっと流れる。

指が響の蕾に触れる。

濡れ、またジョンに解（ほぐ）された柔らかい蕾は、太く長い男の指をあっさりと受け入れてしまった。

三鳥井がびくんと体を震わせ、瞳を淫猥（いんわい）に輝かせる。

経験豊富な指がぬるっと響を犯す。熱く燃えたぎる響の体の奥へと。そして感じやすい場所に触れた。脈動する響の体は、指の感触を何倍、いや何百倍の快感へと変化させた。

「あ——————っ！！」

響は高く淫靡（いんび）な声をあげ、三鳥井のフィンガーテクによって、同業者の男達、そして尊敬する上司・円青樹と愛する弟・伊藤若葉の目の前で激しく乱れ、射精した。

三鳥井の太い指が、ぬるぬるり、と抜かれた。

響の瞳が涙で濡れる。ペニスから白濁の液が放たれ、赤い絨毯を汚した。

三鳥井の興奮した、はあ、はあ、という息が響の耳に木霊する。

脱力した響の体は三鳥井に抱きかかえられた。

そして三鳥井の熱い勃起したペニスが、響の濡れた蕾に触れる。

可憐な蕾が無理矢理引き裂かれようとした。大きなカリがぬいっと情欲に濡れた蕾を広げる。

「ああっ！」

響が大量の涙を流しながら、色っぽい声をあげた。

「やめろ！」

その時、円青樹が三鳥井を制止し、響から引き離した。倒れそうになる響を、飛び起きて駆け寄ったジョンが抱きかかえる。

野獣のように瞳をぎらぎらと輝かせた三鳥井は興奮したまま響に手を伸ばした。だがその指先はピンクパールにあと少しのところで届かなかった。

ぱんっという風を切るような音が脱衣場に鳴り響く。

「三鳥井、なにをやっているんだ！ 気は確かか！？ お前、そんな強引なことをして名波が怪我をしたらどうするんだ！ コカ、名波を至急医者にみせてくれ！」

円が三鳥井を押さえながら頬をひっぱたき、すぐさまジョンへと指示を出した。

「私が名波ちゃんを見るよ。さっ、こっちへおいで」

はらはらと涙を流す響を、ジョンはマッサージ用ベッドへ向かうよう促した。

「あ……待って……まってくれ、響。俺、そんな事をするつもりはなかったんだ。ちょっとお前のケツに触ろうとしただけなんだ。そうしたら指が……菊門に触れて……その……とても柔らかくて気持ちがよくて誘われるように中にぬるっと入れちまって……そうしたら……脈動していて……熱くて……もっと奥へ、奥へと引き込まれて……指にお前が纏わり付いて……もう響のことで頭が一杯になっちまった……お前を抱きたくなった……俺のモノにしたくなって……すまん、俺……響、悪かった！ 本当にすまなかった！」

「もう、二度と私に触るな！」

響は涙で濡れる瞳に怒りを宿し、三鳥井を見た。

「そんな瞳で睨まれても……俺はお前が愛しくてたまらない」

「うるさい！」

響は俯きながら怒鳴った。

「名波さん、大丈夫……」

響に触れようとする若葉の手を、響は軽く弾いた。

「あ……」

「あ……」

響と若葉が泣きそうな顔をしてお互いを見る。

「ご、ごめん、伊藤君……。今は私に触れないでくれ……」

「……………はい……名波……さん……」

若葉は悲しそうに唇を噛み、俯いた。

響はジョンに支えられながら、ゆっくりとベッドへ横になった。そして俯せになり、両手で顔を隠して、嗚咽を漏らした。

「大丈夫かい？ 響」

ジョンが泣き続ける響の髪にキスをする。

「だから言っただろ？ 誰にも君の体を触れさせちゃいけないって。そうやってね、油断しているから恥ずかしい目に遭うんだヨ。君は本当に艶やかで美しい子なのに。人々をその気がなくても誘惑してしまうのに。だから隙をみせてはいけないって、子供の頃から何度も教えた筈だよ。今までだって幾度も怖い目に遭ってきただろ？」

「ひっく……ご、ごめんなさい……ごめんなさい……ジョン……」

「これに懲りたらもう二度と誰にも触らせないようにしたまえ。わかったかい？ 可愛い響」

「……はい……」

皆が心配そうに響の体をチェックするジョンを見た。

三鳥井は目をぐっと開き、円に押さえ付けられながら響を見続けた。

あさひがふうっと溜息を吐く。

「三鳥井さん。僕も名波さんに触れるのはぐっと我慢していたのに、まったく東洋のピンクパールに煽られてコカさんの策略にまんまと乗っかってしまい愚かですね。こんなに嫌われたら、もう二度と名波さんをホテルに誘えないじゃないですか。僕らが恋人同士になるのは無理だとしても寝ることぐらいは出来るというのに、その権利すらたった一回の失敗で放棄してしまってもったいない」

「あ……」

三鳥井は泣きそうな顔をして、あさひを見た。

「……ああ……本当に……俺は馬鹿だ……。こんなに……手を出しちゃいけないって知っていたのに……ずっと我慢していたのに……溺れちゃった……」

三鳥井は響を味わった指先をじっと見つめた。

「あの感触……もう生涯忘れられないだろうな……」

三鳥井の指先を、男達がごくりっと唾を飲み込みながら羨望の眼差しで見た。

「……………ことがことですし、会社から正式な抗議はいたしません……名波さんに、このような非道な振る舞いを二度としないでください、三鳥井さん」

若葉が肩を震わせながら、三鳥井を睨んだ。

「すまなかった。伊藤君。

円さん、もう俺、大丈夫ですから……離してください。すいません、円さんとこの大事な社員に……俺は……すいません」

若葉がカツとし、三鳥井の胸をどんっと突いた。

「大事な社員って！ 分っているならこんな事をしないでください！ こんな業界人が集まる場所で！ 円室長がいらっしゃる場所で！ 貴方は何をなさったか分っていらっしゃるのですか！

？ 僕は名波さんと三鳥井さんが二人っきりの時に何をしようが干渉しませんが、こんな場所であんなことをするなんて、酷すぎます！ 僕がお護りしている大切なお兄……」

若葉はハッと、目をぎゅっと閉じて俯いた。

「伊藤君、すまん……」

三鳥井が若葉に頭を下げる。

その時、響がベッドから起き上がった。

「別に私は大丈夫だ。今、ジョンに見てもらったが、怪我もないし、痛みもない。皆さん、心配をかけてすまなかった。今回の事は私が油断したせいでもある。武道を習っているのに、三鳥井の気配に気付かないなんて情けない。出来れば皆、忘れてくれ」

「忘れられるわけがないよ～」

れもんがおどけて笑った。

「じゃあ夜のおかずにでも使え」

名波がにやっと笑う。

「え～、マジですか～？　じゃあ今度替わりにボクのオナニー動画を送りますから、おかずにでも使ってください」

「オナニーって.....なあ、そのレモンってさ、皮が完全に剥けることがあるのか？」

「ちょ～～～～失礼！　マジ、鬼畜！　名波さんのいけず！」

れもんがべーっと舌を出した。

皆が爆笑する。

「名波、風呂に入ろうぜ」

「はい、円さん」

名波はにっこりと笑った。そして三鳥井をちらりとも見ず、横を通り過ぎていく。

ふっと甘い薫りが三鳥井の鼻をくすぐった。

「あ.....」

三鳥井は小さく呟き、苦しそうな表情で繊細で美しい青年の背中を見続けた。

「残念だったネ。ピンクパールが手に入らなくて」

ジョンが意地悪な笑みを浮かべながら、三鳥井の肩をぽんと叩いた。

「全く、お前って狡猾だよな。今回の罟は俺用かよ。名波が色っぽい瞳で俺の事を見ていたり、目で追っていたのを知ってだんだろ」

「まあネ」

「ビーチで俺が名波を押し倒した時だって、決してあいつは本気で嫌がったりしなかった。いつもなら速攻でグーパンチか蹴りが来るからな。あの時のしっとりとした肌や甘い匂い、そしてあいつの淫猥な瞳が.....俺の判断を狂わせた」

三鳥井は蜜に濡れた指をじっと見た。

「そしてあの滑らかな尻と.....あの蜜に包まれた柔らかい.....」

彼は瞼を伏せ、口惜しそうに唇を噛んで手をぎゅっと閉じた。

「クソッ！　むかつく！」

三鳥井はジョンの肩に肘を乗せた。

「.....今度、あいつをどうやって抱いているか聞かせろよ」

「なにそれ？　夜のお誘い？」

「んなわけないだろ、この鬼畜野郎」

「鬼畜だなんて、最高の褒め言葉だネ☆」

ジョンは柔らかな笑みを浮かべた。

「愛しい人を護るためなら、人は鬼にもなるのサ」

その優しさが籠もったジョンの声は、風呂場に入る醇美な響には届かなかったのだった。

<終り>

またまた特別篇、旅行先で乱れる響ちゃんのお話です。

名波響とコカの話は書籍の方でちらっと書かれています。カラーイラストの名波響はとても攻め顔で、響×若葉を連想させるのですが、書籍挿絵の響はとても受け顔で、繊細な青年として描かれています。

電子書籍の挿絵は立絵を使っていますが、イメージとしては書籍挿絵の響になりますので、書店などでご覧いただけますと幸いです。

しかしこんな乱れた姿を皆の前に見せて、これから名波響はどうなっていくのでしょうか。

きっと円先輩は態度が変わりません。伊藤君は少し動揺していると思います。

コカは名波をもっと大切にしていこうとしましょう。三鳥井は名波に嫌われながらも、切ない恋心を抱いていくと思います。

あさひは手を出す勇気がなく、じっと見つめていくこととしましょう。れもんは態度が変わりません。大同は名波をモデルにした同人誌を発行して一儲けすることとしましょう。サンガは憧れの人として遠くから見つめていくのかもしれませんが。

そして希鈴はやっぱり名波をイジメます。

少し名波の立ち位置が変わった『コカアディクション』。今後もエロシーンバージョンを電子書籍にして発行していきたいと思います。

皆様、ぜひ応援をよろしくお願いいたします。

そしてスマホやPCをお持ちの方、ぜひダウンロードを試してみてください。

この小説はパブーと魔法のiらんどサイトにUPされています。

携帯電話で読みたい方は、魔法のiらんど <http://ip.tosp.co.jp/BK/TosBK100.asp?l=fujimashion&BookId=8&guid=on> をご利用ください。

ではこれからも『伊藤君と円先輩』 <http://drink110.blog29.fc2.com/> をよろしくお願いいたします。

2012年2月17日（金） 藤間紫苑

## 序章

---

この短篇は ▼166本目『三家サイダー まるしばりレモン 7』  
<http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-184.html> の続篇となります。

2012/05/25 前編UP。後編は数日後UP予定です。  
全部UPしましたら、魔法のiランドへとUPします。  
携帯電話サイトの方はしばらくおまちください。

名波響はびくんと体を震わせた。体内に放たれた古河・C・ジョンの精液が熱く体を悶えさせる。体内に残った媚薬とジョンの精液が混ざり合い、さらに響を狂わせた。

すぐ近くにいる弟・伊藤若葉。上司の円青樹。円が満足そうに微笑んだ。そして赤い蒲団の中から、白い精液にまみれた彼の大きな手が現われる。

若葉の瑞々しい精液の香りが響の鼻をくすぐった。

愛しい弟が寝ている時にこっそりと、何度も飲んだ精液。口の中に蘇る味。

達したばかりの脱力した若葉の口元に、精液がつうっと塗られた。

「若葉、舐めて手を綺麗にしてくれ」

「円先輩……あの……皆さんが見ていらっしゃいます……タ、タオルで……」

「舐めなさい」

若葉が頬を染め、恥ずかしそうに少し俯き、ペロペロと子犬のように円の手につく自分の精液を舐め始めた。

円がびくんと震える。

「若葉の舌は妙に気持ちがいいな」

「そうですか？」

色っぽく目を輝かせながら円の手を舐める若葉。ピンク色した舌の先端がぺろん、ぺろろんと大きな手を上下する。

その姿をじっと響は見つめていた。

弟が、大切な弟が円青樹の色に染められていく。いつかは誰かの、いや昔から祖父が気に入っていた円青樹のモノになるのだろうと響は思っていた。自分を兄として慕ってくる可愛らしい純粋な少年が青年になっていった時から、いつかはこの男に抱かれるのだと。

ふと響は円と目が合った。その眼差しは響の隠された弟への情欲を見透かしているようだった。

円は響から視線を逸らさないまま、いやらしく弟の項を舐めた。長い舌を響に見えるように伸ばし、つつつと這わす。

「はっ……！」

若葉がふるっと体を感じさせる。脱力していた体に再び情欲が戻ってきたかのように緊張していく。

すぐに手が届く距離。いやコカに手を拘束されている今、それは出来ない。

そう、ちょっと体を伸ばせば、キスが出来る距離に弟・若葉はいた。彼の吐息が響にかかる。弟が放った精液の香りが兄を興奮させた。

その匂いを打ち消すかのように、自分の精液の香りが強くなっていく。ぬるぬるとした感触。

ジョンがゆっくりと響の精液を、胸元と首筋へ、そして若葉と同じように響の唇へと塗っていた。

響はいつものように、ジョンの掌を舐め、そこに溜った自分の精液を口に含んだ。

「伊藤君、名波先輩がお手本を示してくれているぞ。いつもああやってやるんだよ」

「え……」

若葉がびっくりし、響を見た。響と若葉が兄弟だと知らない円が、兄の性技を手本にしろと言う。

響は真っ赤になり、舌を引っ込める。

普段通り、ジョンから何か言われる前に自然と自分の精液を舐めていた響。彼はそんないやらしい体になっている自分を弟に見られ、恥じた。

「いやあ、凄いシーンですね、円さん。名波君も伊藤君も麗しくって、ぼく感動しましたよ。それに不思議とお二人の声が似ている。イク時の声なんて双子のようでしたね。普段の名波さんはもっと低音だし、伊藤君はちょっとそれより高いし、似ているようには聞こえないのに不思議だ」

円の後ろに横たわる大同が、身を乗り出して微笑んだ。

「……そうですね」

円が相槌を打つ。

「大同さん、ツッコミどころが声優オタク目線です」

響の頭上に寝ているあさひが、くすりと笑った。

「ええ、ぼくは声優のおっかけもしていますからね。それに精液の匂いも似てる。社食で同じ物を食べると似てくるのかな」

「俺、名波響って……イかないのかと思ってたから……ショック……」

大同の頭上にいるサンガが悲しそうな声で呟く。

「え？」

サンガの横でにやにやと笑いながら見ていた三鳥井が驚きの声をあげた。そして皆がサンガを見る。

「さっきも風呂場で響は達していただろう？」

三鳥井がそう言うと、コカが静かに彼を睨んだ。

サンガがはっとし、三鳥井を見る。

「あっ……そういえばそうツスね……」

でも俺と……その……していた時っていくら舐めても、……い、入れられた時も……名波響がイクコトって一度もなかったから……イかないヤツなのかなって思ってて……。こんなエロ声も聞いたコトがなかったし……。

そもそも名波響って色っぽい声をあげてなかったから、感じているのかも分らなかったツス。無表情だったし……。一応、勃起はしていたから、そこそこ気持ちいいのかなって思っていたけど……俺ばかりが一方的に感じちゃってて……。俺が名波響を悦ばすコトは一度もなかったツス」

「名波さんの鬼っぷりに全ボクが泣いた～」

あさひの隣に俯せ、爛々と瞳を輝かせながら四人の行為を見ていたれもんが、泣いたふりをして涙を拭き取る仕草をする。



「で、でも円先輩。希鈴さんもいらっしゃるのですよ？」

希鈴がふっと笑い、若葉を見た。

「おこちゃまが大人の心配してるんじゃないわよ。あつたしなんてコカ公にしょっちゅう見せられてもう飽き飽き。今日なんてあんたと円様がいるから、これでもぬるい方よ」

「あ～、お前、響と仲がいいもんな。そりゃあコカ公の嫌がらせだ。俺なんて少ししか見せてもらってないぞ」

三鳥井が不満そうに唇を尖らせた。

「べ、別に仲がいいわけじゃないわよ。そりゃあ名波とは腐れ縁だけど！　こんなひ弱なお坊ちゃんより、あたしはワイルドな円様みたいなのが好みなの！」

「円の兄貴が凄いのは別格として、別に名波はそれ程ひ弱じゃねーだろ。円さんとかコカ公とか俺とかと並ぶとひ弱に見えるけど、日本人の中じゃ体格良い方の部類に入るぜ」

「そん中でひ弱に見えたら十分でしょ。あたしを誰だと思ってんのよ」

「はいはい、希鈴様、希鈴様」

「むかつく、このイカ男！　あたしの横でベッドを汚したら承知しないわよ！」

「はいはい。執事さ～ん、コンドームくれる？」

三鳥井が手を挙げると、あさひ、れもん、大同、サンガが同時にそっと呟った。

「まったくあんた達、最低！！」

「そう言われましても希鈴さん、ぼくなんて生のセックスシーンを見るの初めてなんですよ？　興奮もしますって。

正直その……コカさんのペニスがどうやって名波さんに挿入されているのか、目の前で見ていても分らないぐらいですよ」

大同が頬を染めながら希鈴を見た。

れもんが蒲団の下から現われた響の尻を見続けながら、うんうんと頷く。

「コカさんと円さんのペニスってモンスター級だよ。ボクも今、このサイズがアナルに入るもんなんだって感心してた～」

「指でちゃんとアナルの中までマッサージして、ローションをたっぷり使って滑らかにしておくのがコツだよ★　力づくでやると痔になるし、肛門が壊れてしまうからネ。今日は久しぶりだから、響が大好きな滑りの良いローションを少し多めに注入したんだ。ねっ、響」

コカが皆に見せつけるかのように、響の乳首をきゅううっと高く摘み上げる。

「感じ過ぎちゃう！　いやああああああ！！　止めて！　止めて、ジョン！」

「君の締め具合は本当に素晴らしいよ。乳首を弄られるのが大好きなんだよね。さあ、皆さんに世界で最もいやらしい君の姿をお見せしなさい」

響の体に自らの精液が塗られていく。ぴんっと勃った乳首がテラテラと濡れる。

コカの太い指が乳首に触れるたび、響は体を振り、瞳を濡らした。脱力していたペニスが再び興奮を取り戻す。

「目の前で自分以外のペニスが勃起していくのって新鮮ですねえ。名波君の体って陰毛の生え方から凄くいやらしい。あ、そうか。体毛が薄いんだ。だから白くてきめ細かい肌が興奮するとそのままピンク色に見えるんですね。そこに汗が流れるとピンクパールが生まれるんだ」

「大同さん、真面目に分析しないでくださいよ。聞ってるこっちが恥ずかしくなります」

「伊藤君、恥ずかしがるなんて名波君のコト、意識しちゃった？」

大同がくすつと笑う。

「別に名波さんを意識なんてしませんよ」

若葉は心の中で、色っぽいお兄様は見慣れているし、と思った。

「ふうん、そうなのか。名波を見ながら若葉がこんなに硬くしているから俺も君が名波のことを意識しているのかと思ったよ」

円が若々しくそそり立った若葉のペニスをゆっくりと付け根から先端へと撫でる。

「ま、円先輩に抱き締められて興奮しない人がいるなら会ってみたいものです.....あふっ」

若葉は円にペニスをしごかれ、体をぴくんっと反応させた。瞳が愛欲に潤み、若くしなやかな体を仰け反らせる。

それに呼応するかのよう、響の体が震えた。

「んっ！ 今の締め方はとても素晴らしかったよ、響。そのまま」

コカが腰を引き、響の肛門から亀頭を残し硬いペニスを抜いた。

太く長いペニスが皆の前に現われる。強い雄への畏怖や警戒心が男達の瞳に浮かんだ。

「締めてて」

コカの優しい声が、肉体が激しくぶつかる雄々しい音にかき消された。

「いやあ！ やだ！ ジョン！ そんな奥まで、奥まで強く突かないで！ 強く突かないで！ 引き抜かないで！ 穴が！ アナルがゾクゾクしちゃう！ 奥！ 奥っ！ 嫌っ！ そこ強く突いちゃ嫌！ 狂っちゃう！ おかしくなっちゃう！ お尻が、お尻が広がって気持ち良くなっちゃう！ 気持ちいい.....気持ちいいの！ ダメ！ やだ！ お願い許して！ ここでは止めて！

蒲団を掛けて！ お願い！ 見せないで！ 私のくるう.....姿を.....わか.....に、見せないで！ お願い、ジョン！ 許して！ ごめんなさい！ もう絶対他の人と寝ないから！ セックスしないから！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ 許してゆるして許してゆるして許してゆるして許してゆるして許してゆるして許して！ そんな、ヤダ。動かないで！ 突かないで！ 私を貫かないで！ ぬるぬるして死んじゃう！ お尻を、お尻の入口を貴男が広げて閉じてひろげてとじて広げて閉じてひろげてとじてぬひいってぬひいってぬひいって、何度もなんども何度もなんども広がっちゃうの閉じちゃうの！ 熱くてぬるぬるしてて硬くて無理矢理広げられちゃうの！ ね、根本まで入

ってくるの！ 奥まで入ってくるの！ 貫かれちゃう串刺しにされちゃううううううううう！  
抜いて！ やだ！ 抜かないで！ やだ！ もっともっともっともっと突いて突いて突いて突いて  
突いて奥まで奥までおくまで奥まで、そこもっと突いて！ ひうつ！ やああああ！ 乳首  
つねっっちゃ嫌！ いやいやいやいやいやああああああああああああああああああ！！ 強い  
の熱いの頭が沸騰しちゃうの乳首が熱くなるの！ ああ、締めると貴男を感じるの！ 貴男が体  
の中にいるの！ 体全部が貴男のオチンポなの！ もっと頂戴！ もっともっともっと欲しいの  
！ 掻き回して！ 突いて！ 抜いて！ ち、乳首を.....あひい！ ひいいいいいいいいいい  
いいいい！！ イっちゃう！ 頭がおかしくなっちゃう！ ち、乳首でイっちゃう！ 熱  
くてゾクゾクして頭が沸騰するの！ 沸騰しちゃうの！ 熱くなるの！ 体が欲しいの！ ち、  
乳首で、もっとイかせて！ 私を突いて！ 乳首をもっと抓って引っ張って挟んでもっと強くつ  
よく強くつよく強くああああああああ！ もっとイかせて！ もっと私を狂わせて！ 欲しいの  
！ ジョンが欲しいの！ 乳首を虐めて欲しいの！ 熱くして！ もっと爪を立てて！ 奥まで  
おくまでもっときて！ きてきてきてジョンのスペルマで一杯になったお尻を突いて！ 朝から  
何度もなんども貴男が種付けしたアナルを犯して！ 犯して！ 掻き回して！ 広げて！ 突  
いて！ 熱くて死にそうなの！ 気が狂っちゃうの！ やだっ！ 足を広げたらやだっ！ 恥ず  
かしいから止めて！ 陰囊を揉まないで！ やだっ！ 気持ちいいの、ぬんぬんな気分になっチャ  
うの！ 体がにゅいにゅいしちゃう！ 貫かれちゃう！ ジョンに刺されちゃう！ 体がジョン  
で一杯になっちゃう！ 見ないで！ お願いだからみんな見ないで！ やだやだやだやだ！ ジ  
ョン、もう止めて！ 見てるの！ みんなが見てるの！ 見られてて恥ずかしいの！ 抜いて！  
もう離して！ 手を解いて！ お、おか、犯さないで.....嫌っ！ やだ、やだやだジョン、抜  
いちゃやだっ！ にゆるって抜いちゃやだっ！ 欲しいの、ジョンのペニスが欲しいの！ やっ  
、やっ、やっ、やっ、広がっちゃう！ そこ一番広がっちゃうトコなの！ アニヤルが壊れち  
ゃう！ ジョンのペニスでアニヤルが壊れちゃうの！ 壊されちゃうの！ ダメ！ 入れて、突  
いてももっともっともっともそこ.....やだっ！ そこ感じやすいからやだっ！ もっとおかし  
くなっちゃうからヤダ！ 突いて欲しいの！ でもおかしくなっちゃうからダメなの！ 頭がお  
かしくにやっちゃうの！ はうん、あうん、あはっ、はっ、あうっる、か、硬いの、硬いジョ  
ンが、ジョンの亀さんが私をはくはくしてるの！ つついてるの！ 感じるのそこかんじるの  
一杯いっぱい感じるの頭おかしくなっちゃうのイキっぱなしにいつちゃって、ヤダ、ジョン！  
やだ、人、人前でやだっ！ やだっ！ 二人が見てるの！ もう止めて！ 頭がおかしいの！  
熱いの！ ひさ、寿が見てるから！ やだ、もう見せないで！ こ、こんにゃ恥ずかしい姿を見  
せないで！ 守って欲しいの！ 嫌っ！ だから見せないで！ 守って！ ジョン、守って！  
寿にもR先輩にも私を触らせないで！ 見せないで！ こんな姿を見せないで！ お願い！ 辱め  
ないで！ やだっ！ 見られてる！ おかずにされてるの！ みんなが目で犯してくるの！ 視  
線が.....絡まって私の体に絡まってからまって興奮しちゃうから！ やだっ！ 勃起してるペニ  
スが見られちゃうから！ 恥ずかしいからもう止めて！ ジョン、止めて！ みんなに犯されて  
るみたいに感じちゃう！ いやああああああああああ！！ 乳首いつちゃうろいつちゃうろ  
いくイクいくイクいつちゃういつちゃういくろイクろそこ強くもっと強くああああああああ



っとモットもっろモツロお、おか、犯してついて抓着て舐めて抱いて握ってキスしてちゅっちゅしてチュウしてちゅうって吸って抓着てもっと強く！ 強く！ もっともっともっどひいいやややややああああああああああああああああああ突いて！ もっと力強く突いて！ 奥まで！ つ、つねってつねえええええ嫌いやイヤいくイクひくイクくくくくくくはっ！ はあっ！ ひゃっ！ ひゃん！ ひゃん！ いい！ あああっつはあああんはっ！ はっ！ はっはお、おか犯され！ はっ！ いいっ！ いいのいいのいいのいいのいいの愛してる愛してるアイシテル大好き大好き愛してるの、ジョンッ！！ 愛してる！」

ほうんっ！ と叫び、響は仰け反りペニスをブルルンっど震わせて射精した。飛び散った白い精液はキラキラと輝きながら、若葉の蒲団へ、そしてパジャマへ、さらにはふっくらとしたピンク色の唇へと迸った。

「あっ……」

ドクンっ、ドクドクっどジョンの放つ大量の精液を体内に受け止めながら、響は小さく呟いた。

弟の唇にぬっとりど自分の精液が付着している。

艶麗な瞳の響はぼんやりと、円に弄られ再び射精したばかりの脱力した若葉を見ていた。

若葉はぼっどとした艶めかしい瞳を響に向けながら、自分の唇に付いた兄の精液を小指ですうっど拭き取り、いやらしい舌先で舐めた。

視点の定まらない響を俯せにし、コカは満足そうにペニスを抜いた。

巨大な肉棒を銜え込んでいた響の桜色に萌えるアナルはぼっかりと口を開き、そこからドクンッどろん……と白濁の精液が溢れ出てきた。淫猥の汁はつうーっどビーナスが流す涙のように煌いた。

「ふふっ、相変わらずこの眺めは美しいな」

コカが手を挙げると、執事が宝石箱を持ってきた。

「さあ、君が大好きなアナルジュエリーだよ。私のスペルマがこれ以上漏れないように栓をしないとネ」

コカは優しく微笑みながら、巨大なピンクダイヤモンドが輝く太いアナルプラグを、響の肛門へと差し込んだ。

「はんっ！」

響がビクンッど跳ねる。その白い双丘の谷間に薔薇のような煌くピンクダイヤモンドが植わっていた。

腕の拘束を解かれた響は裸のままベッドの上に座り、膝を抱え込んで俯いていた。

「あー……………」

彼は弱々しく後悔の声をあげた。

再び部屋が静かになる。

言葉を放つ者はいない。皆が響とコカの様子を見ていた。

ベッドは全て綺麗なシーツと蒲団に替えられ、男達が放った精液の香りは薄まっている。

だが。

響の体に塗られた愛欲の香りは消えず、どうしても匂いに敏感なドリンク業界人達を刺激する

。

それが再び先程目の前で繰り広げられた淫らな宴をリフレインさせた。

響は一瞬、キッとコカを睨むが、再び視線を落とした。

「……………悪かったよ、ジョン。もうしない」

「わかってくれたようで良かったよ。響」

「……お前だって何人もと寝てるくせに」

「あれは仕事。君のはただの私怨だろ？」

「……………」

「なんだ、可愛い奴だな。ヤキモチを焼いていたの？ 君は何も言わないから気にしていないのかと思っていた」

「別に……。言っても仕方ないだろ。『仕事』なんだから」

「君が定期的に私と寝てくれたら、もう他の人と寝ないよ。事実、響が学生の頃は君としか寝ていなかったじゃないか。まあ、君が私の性欲を毎日根こそぎ奪い取っていたからだけどネ★」

「……………恥ずかしい事をお二人の前で言うな」

「俺は聞きたいけど」

円がにやにや笑いながら言った。

「ま、円さんにお聞かせするような話ではありませんよ」

響は真っ赤になって、円を見た。そして若葉に視線を落とし、気まずそうな顔をして再び俯いた。

「……いいじゃないですか、名波さん。別にオフの日ならコカさんと……その……お付き合いしても。お母様……あ、名波さんのお母様が納得なさっていらっしゃるのでしょうか？ もちろん転職されると僕はひじょおおお——に困りますが、オフだったらいいのではないですか？ ついでにコカさんとの機密情報も持ってきてください」

そう若葉が言うと、コカがぷつと笑った。

「いい子だね、若葉君は」

「コカさんがいい人だからですよ。変な人でしたら名波さんは大切な先輩ですから、僕は全力で阻止します」

「信用されたのか。嬉しいよ」

コカは響に寄り添い、そっと肩を抱いた。

「君を大切にしたい。ずっと一生守ってあげるよ。私の響」

赤い髪の王者が瞳を閉じて、静かに囁く。甘く、蕩けるような声色。

響は顔を伏せながら、こくんつと頷くのだった。

愛と潤いのドリンク劇場『伊藤君と円先輩』 ▼ [167本目『旨味 極一番茶』](#) (N:藤間しおん I:石原理) <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-185.html> へ続く。

## あしがき

---

こんにちは。藤間紫苑です。

『コカアディクション3』をお楽しみいただきましたでしょうか？

一気に仕上げるつもりが、二回連載になってしまいました。申し訳ありません。  
多分来週もまた短篇小説をUPします。

これはブログの続きになりますので、もし読んでいらっしやらないようでしたら

<http://drink110.blog29.fc2.com/> をぜひご覧ください。

それではまた来週.....??

藤間紫苑 2012/06/01

## 序章

---

この作品は『伊藤君と円先輩』 [▼175本目『紅茶華伝 香る桜 4』](#) の続編となります。

詳しくは [『伊藤君と円先輩』](#) をご覧下さい。

名波響は伊藤苑研究室から出てすぐにスマートフォンを開いた。白い廊下をコツコツとゆっくり歩く。

古河・C・ジョンから届いた愛のメッセージを響は何度も読み返した。

『やあ、響。今も工作中カナ？ 私は今、羽田のホテルにいる。今日は品川で4つ程会議が重なってしまい、もうへとへとだ。

明日の朝には中国へと渡る予定だ。今夜は一人寂しくホテルで寝ているよ』

一人寂しくホテルで寝ているよ、という文を響は何度も頭の中で繰り返す。先日の海外旅行から後、毎日メールにはこの一文が載っていた。

——君が定期的に私と寝てくれたら、もう他の人と寝ないよ。

ジョンが響にしてくれた大切な約束。

響は暗い廊下でふっと笑い、頬を染めた。精力的なジョンが響としか寝ないと約束するのはとても大変な事だと響は知っていた。湧き上がるエネルギーを自慰によって放出するのと、人との交わりの中で放出するのでは全く満足感が違う。だがジョンは響としかしないと約束してくれたのだ。周りにはS Pと男娼のWスペックを兼ね備えた才色兼備の男達が常時立っているのにもかかわらず。

——ジョンに逢いたい。

そう思い、響はスマートフォンをみつめた。

『この美しい星空を君も会社から見上げているだろうか。あの旅行で君が流した輝く涙を思い出すよ。響の瞳は月のように静かに艶めかしく輝いていた。そこから流れ落ちる涙は流星のように私の願いを聞き届けてくれていた。君と一晩中愛し合いたいという切実な願いをネ』

しかし愛のメッセージを寄越したジョンは今、羽田にいる。近いのに手が届かない距離。同じ国の中に滞在しているのに、とても遠く感じる。昔、彼と一緒に泊まった羽田のホテルを思い出しながら、響は大通りへと出た。

会いたい。でも会えない。

円青樹、伊藤若葉、そして名波響という伊藤苑研究員の主要メンバーが休養を取った後、仕事は文字通り山積みになっていた。休暇が終わって十日間過ぎても、三人に休日は訪れなかった。

休日に逢おうと約束した二人だったが、休日がなければ逢えない。

旅行で味わったジョンの愛撫。ペニス。吐息。声色。匂い。油断すると職場でも思い出してしまう激しい情熱。汗。

響はジョンに逢えない寂しさに少しイライラしながら仕事をこなしていた。

まるでコーラにアディクションする若者のように。

彼のペニスがスペルマが愛が欲しいと、餓えた喉をカラカラに渴かしながら響はジョンとのデートを待ち侘びていた。

彼の事を考えるだけでアナルがひくっと震える。ペニスに愛が集まる。

だが響はもう伊藤苑の後継者を目指すと決意してしまった。愛するジョンの夫ではなく、ライバル会社の社長になる道を歩み始めたのだ。

いくら愛していても、好きでも、体が彼を求めても、響とジョンは結ばれない。だが一緒になれないと知っているからこそ、二人は貪るように抱き合い、熱いセックスをした。

響は後ろからゆっくりと近寄る車の気配を感じて、スマートフォンを閉じる。

車は響の少し前に止まると、黒いサングラスを掛けた体格の良い男性が運転席から降りた。

「響様。ジョン様から響様の警備を仰せつかっております。ぜひ私共の車をご利用下さい」

男は響と顔見知りだったが、即、身分証明書を提示した。

伊藤苑に入社してから、ジョンの好意を何度断り続けてきたのだろうか。響は少し考えてから、ふっと笑い、後部座席へと向かった。

いつもは無表情なS Pが驚きの笑みを浮かべる。そして響の意志が変わらないうちにと、即座に後部座席の扉を開けるのだった。

「どちらに向かいますか？ お疲れのようでしたらジョン様のプライベートルームがHホテルにございます」

S Pは言葉を選びながら、そっと響へと提案した。学生だった頃の響は何も言わず車に乗り、何も言わずジョンが借りているホテルへ入り彼とセックスしていた。しかしライバル会社である伊藤苑に入ってから、響はそういったジョンとの＜馴れ合い＞を殆ど断り続けていたのだった。

響は少し疲れた、それでいて色気のある視線をS Pへと向ける。

「ああ……うん。そうだね。Hへお願い」

伊藤苑では見せない、少し子供っぽい声で響はS Pに返事をした。二人が出会ってもう十年程になる。学生時代を思い出し、響はふっと笑った。

「かしこまりました」

S PはカーナビでHホテルを指定し、車を出発させた。

響は窓の外を見ながら、伊藤苑入社式当日を思い出していた。

『響、伊藤苑、入社おめでとう。さあ、手を出して。入社祝いだ』

伊藤苑本社ビルから駐車場へと向かう響に、帝王のオーラを放つ男が車の中から声を掛けた。

響はちらっと車を見てから、きよろきよろと辺りを見渡し、はあっと溜息を吐いた。

『ジョン。もう私は伊藤苑の者だ。お前のライバルなんだぞ。気安く声を掛けるな。同僚に見られたらどうするんだ』

『怒った顔も可愛いネ。ほら、手を出して』

響は立ち去りそうもない強引な男に押され、手を出した。温かい愛する男の大きな手と、冷たいカードキー。もっとこの手を握っていたい。そう響は思いながら、手を引っ込めた。

『……なんだこれは』

『Hホテルのルームキーだよ。君の入社祝いだ。疲れたらいつでもおいで。待ってるから』

『誰が行くか。……でも貰っておこう。ありがとう』

『どういたしまして』

そう言うとジョンは投げキッスをし、車を静かに発進させた。

懐かしい思い出。一度も使った事がなかったジョンのゴージャスな愛。

響はルームキーをぎゅっと握って、Hホテルを見上げるのだった。

★

ホテルに車が着くと、支配人がにっこりと笑いながら立っていた。

「お待ちしておりました。名波様」

「今夜は世話になるよ」

「はい。古河様のバトラーが一名程いらっしゃいますが、当ホテルのコンシェルジュはご入り用ですか？」

「いや、必要ない。朝食は五時四十五分に届けてくれ」

「かしこまりました。軽食はいかがなさいますか？」

「すぐに寝るから、必要ない」

「かしこまりました」

支配人は部屋に案内すると、鍵を開け、深々とお辞儀をしながら響が部屋に入るのを見送った。

「響様！ お待ちしておりました！」

部屋の中にはジョンが響に用意してくれた昔なじみの執事が立っていた。

「今晚は、バトラー。旅行以来だね。……君はいつもこの部屋にいるの？」

「はい。私は響様付きですから、響様が伊藤苑へとお出勤なさっている日はこのホテルに在駐しております。響様が出張なさっている日は、近くの部屋にありますよ。ご不便を感じた時はいつでもお呼びくださいませ」

「……私にバトラーを付ける必要などないのにね。君も大変だ」

「私は響様のバトラーに選ばれて光栄でございますよ。響様はジョン様が心を許されていていらっしゃる唯一のお方です」

そう言いながらバトラーは響のジャケットを脱がした。

「……でもここから先は脱がしてくれないんだ」

「もちろんですとも。ジョン様におしかりを受けますからね。美しい響様の肌に直接触れるのはジョン様だけの特権です」

響はじっとバトラーを見て、にっこりと美しく、少し意地悪な笑みを浮かべた。

「……じゃあ君は私の『お相手』はしてくれないのかな？」

そして彼の白い指がバトラーの股間に触れそうになる。

ふっと、バトラーが後ろに一步下がった。

「お戯れをお止めください、響様。首になってしまいます」

「首になったら私が雇ってあげるよ……って言いたいところだけど、私より君の方が給料は高そうだね」

響はくすっと笑って両手を軽く挙げ、おどける。

バトラーは何事もなかったかのように振る舞い、簡単に部屋の説明をし始めた。

「入ってすぐがリビングルーム。そしてダイニングルーム。こちらが書斎。ここの扉がバスルーム。トイレ。奥がベッドルームになっております。バスルームに私は立ち入る事が出来ませんが、緊急ボタンを押してくださるか、声を上げてくださればすぐに参ります。

タオル、玩具、ローション等はこちらに入っております。トイレは本家と同じようにバスにも用意されておりますので、ご利用ください」

響はジョンと自分のペニスサイズのディルドを手を取った。

「……全く、ジョンの奴。どこにでも置いてるんだな。恥ずかしい」

「ジョン様の宝物ですからね。よく響様を思い出しながら抱いて寝ておりますよ」

「……そうなんだ」

響は真っ赤になりながら、着替えるから、と呟いた。

「ごゆっくり」

静かにバトラーは脱衣場から出て行った。

いつもながら完璧な男だ、と響は感心する。歳は四十代ぐらいだろうか。物腰は柔らかいが、黒いスーツの下は美しくしなやかで強い筋肉に覆われている。大勢いる古河家SPの中でもかなり優秀な方だろう。

響は服を脱ぐと、ジョンディルドとローション、そして浣腸を持ってバスルームに入った。

響はいつものように浣腸を便器の近くに垂れ下がる金具に引っかける。ちゅううっとローションを出し、アナルにたっぷり塗った。

「……んっ」

毎日浣腸を欠かさない響だったが、旅行の後、体調がおかしくなっており、背中がぞくぞくと震える。ふとしたきっかけでセックスを思い出す。体が敏感になる。アナルに指を入れてローションでマッサージするという日課に過ぎない行為なのに、異様なほど感じてしまう。

——コカアディクションか……。

昔、頭痛薬として販売されていた古河家のコーラ。痛みを和らげる効果があり、大ヒットしたという。

まるで古河家初代のように響は緩い頭痛を感じていた。さらに放置すると喉が渇き、そして体が震える。

ジョンが欲しいというアディクション状態に陥ってしまう。

彼とキスしたい。抱きたい。犯されたい。突っ込まれたい。激しく。もっと激しく。そんな妄

想が脳内と体を駆け巡る。

ジョンが響に溺れ、響がジョンに溺れた。二人はお互いを求め、いつしかセックスをしなければ思考力さえ奪われるような関係になっていた。

全世界で飲まれている古河家のドリンク、痺れるようなコーラへとアディクションする若者達のように響はジョンに夢中となった。またジョンも、極東にある小さな会社の美しい御曹子から離れられなくなっていた。

ぴくんと体を震わせ、響はぬるぬるになったアナルへと浣腸器を差し込む。体内に入ってくる冷たい感触。

こんな細い管ではなくて、あの……ちらりと響は赤いディルドを見つめる……ペニスを入れたい。掻き回したい。体の奥を。もっともっと奥を。

管を抜き、暫く便意を我慢する。浣腸を入れてから、もしこの液体にまた媚薬が仕込まれていたら……と考えたが、大丈夫なようだった。

響は便座に座りながら暫く、ぼおつと天井を見つめていた。段々便意は強くなっていく。ペニスが反応し、ぴくりっと動いた。

昔、何度もこの状態のままジョンに犯された響は、その快感を思い返していた。

指を入れて掻き回したい。いやいっそディルドでめちゃくちゃにしたい。穴を広げて入れて奥まで差し込んで抜いて突っ込んで抜いてぬるぬるぬぼぬぼと何度もなんども繰り返して……。

そんな妄想をしつつ、響は指でアナルをマッサージし、ディルドをペロりと舐めた。

入れたい、入れたい、イレタイ……。

ジョンニオカサレタイ……。

カンチョーシタアナルをオカサレタイ。カキマワシテ、カキマワシテ、ブチコンデ、ジョン。

響は瞳を虹色に輝かせながらディルドにローションをたっぷりとかけ、アナルへと押しつけた。

。

その時。

ホテルの屋上からヘリコプターの着陸音が聞こえた。

響は喜びに体を震わせ、天井を見る。

——まさか、ジョンがホテルに！？

だが急病人を運ぶドクターヘリかもしれない。明日仕事で中国へと渡るジョンが来るわけがない。

響はハッと、正気を取り戻すと、ディルドを横の棚に置き、排便をした。

すぐにシャワーを浴び、ディルドを持ったまま湯船に浸かる。広い風呂だ。こんな風呂が会社にあったら……と響は思った。

ヘリの音は段々静かになっていく。

ジョンが来てくれたら……このヘリがジョンを乗せてきてくれたら……。

小さな可能性に賭けながら、響は赤いディルドを舐めた。

もし……ジョンが来てくれたら……。

「響！！」

響がディルドを喉の奥まで咥えた瞬間、バスルームの扉が開いた。咄嗟にディルドを口から出す。

「……………可愛い」

ジョンが蕩けるような眼差しで、響を見る。

響は真っ赤になって、赤いディルドを腰の後ろに隠した。

「な、な、なんだ突然！ か、かかか帰ってきたのか！」

「響、そんなにも私の帰りを待ち侘びてくれたんだね。私の分身を愛撫して、喉の奥まで銜え込んで。なんて愛らしい男なんだ」

「あの……その……待ってはいたけど……こら、服のまま入るなよ！」

「君に一刻も早く触れたい」

そういつてジョンはスーツのまま湯船に入り、響にキスをした。

「んっ！ んっ……ー……！！」

響は無理矢理足を開かされた。

割り込んでくるジョンの足。濡れて重くなったズボンが響の内腿に触れる。

情熱的な唇が響を襲った。お帰りなさい、とも、お疲れ様、とも言う事を許されず、ただただ唇を奪われる。

ジョンの濡れたズボンが、響の硬くなったペニスに触れた。

「んーっ！」

しなやかな足を包む繊維が、響の感じやすい場所をこする。体が震える。快感が一気に股間から脳へと突き抜ける。アナルがひくひくっと収縮し、熱いペニスを待ち侘びる。

響はキスをしながら、嫌々と首を振った。感じ過ぎてしまう。もう達してしまう。ベッドの中じゃなくて、浴槽の中で。このお湯へと放ってしまう。

だが口は塞がれ、何も話せない。瞳で訴えても、餓えた獣はエサを口から離そうとしなかった。

その時。

脱衣場に人影が揺れた。

「ジョン様。……お取り込み中の所、失礼いたします。スーツをお脱ぎくださいませ」

「……分った」

ジョンはしぶしぶネクタイを外し始めた。脱いだ服をぼいぼいと入口近くに放る。

鍛えられた美しい肉体が響の目の前に現われる。そして漢らしく勃起したペニス。

靴がぼいっと投げられた。

「お前なあ、靴ごと浴槽に入るなよ」

「我慢出来なかったんだ。私は君が伊藤苑に雇われてから何年もこのホテルで待っていたんだよ

「？ 東京で寝る時は大抵このホテルを使っているんだ」

「もっとお前んとこの本社ビルに近いホテルを借りろ。時間の無駄だ」

「だってそんな事したら君が泊まりに来てくれないじゃないか。いつもすぐに家へと帰ってしまう箱入り息子なのにサ。ここから出勤すればいいのに」

「アルバイトがホテルからご出勤とか出来るか！」

「うちの社員になれば？ 私の秘書になれば余裕でホテルから出勤出来るよ」

ジョンが意地悪くにやっと笑った。

「な、ら、な、い」

響がジョンに顔を近付けて、意地悪く言い返した。

そしてそのまま唇を重ねる。

ずっと響は離れ、ジョンの瞳を覗き込んだ。

「私がお前にあげられるのは、愛だけだ」

「愛はくれるんだ」

「愛は経営に必要ないからな」

今度はジョンからキスをする。

「君の余暇が全部欲しいよ、響。先日の旅行で改めて分っただろ？ 私達はとても相性がいいんだよ。お陰で戻ってきてから仕事がはかどる」

ジョンが響のペニスをそっと握る。

響がびくんと震え、はあっと息を吐いた。

もう欲望を放ってしまいたい。そんな欲求で響の頭は一杯になった。その瞬間、ジョンが硬くなったペニスの根本をぎゅっと締める。

「まだダメだよ、可愛い響。さあ、体を洗ってベッドへ行こう」

ジョンが優しく響の耳元で囁く。

響はぞくっと体を震わせながら、最高に美しい恋人は自分の格好良さを自覚しているのだろうかかと疑った。

美声過ぎて、耳元で囁かれるだけで達してしまいそうになる。そんな貴公子。

だがペニスは美声の主に握られ、欲望を押さえ付けられていた。

早く出したい。

そう思った響は、こくんっと頷くのだった。

★

東京の夜景が見渡せるホテルの最上階に響はいた。バスから出て裸のまま窓際に立つ。

「.....さすがにこの時間は静かだな」

夜の新宿は昼間と違う顔を見せる。交通量は減り、人影もまばらだった。遠くに伊藤苑本社ビルが見える。愛しい弟や上司の円青樹はまだ仕事をしているのだろうか。もう寝ただろうか。疲れている同僚達を寝かしたのだろうか。響はじっと伊藤苑ビルを見つめた。

「また仕事の顔になってる。大丈夫。円君がいるだろ？」

「円さんは結構ずぼらなんだよ。仕事に関しては天才的なカンを働かせるけどな」

「だから君がいないとダメだって？」

ジョンはくすくすっと笑って響を後ろから抱いた。

「君がいないとダメなのは、私も一緒だよ。仕事の効率が落ちまくりだ」

ジョンの勃起したペニスが響の尻に触れる。響はごくりっと喉を鳴らした。

「そりゃ良かったな。私がライバル会社の効率を上げてどうするんだ」

「学生時代は秘書をやってくれたじゃないか」

「あの時は修行期間みたいなものだったからな。お父様にも止められてなかった」

「今なら止められる？」

「当たり前だ。そもそも伊藤苑に早く入社しろと言ったのはお父様だ」

「このファザコン」

「お前達他社のエージェントが円さんの周囲をうろちよろするからだろうが。私はもう少しジョンと一緒にいられるのかと思っていたのに……」

響は少し寂しそうに俯いた。そして小さく呟く。

「でももう過去の話だ」

「私達の関係は一生だよ」

ジョンは響の髪にキスをした。

それからベッドに弾みをつけて座ったジョンは両手を広げて微笑んだ。

「さあ、響。愛し合おう。おいで」

響はジョンの膨張したペニスを見てかあっと頬を染めた。そしてこくんっと頷く。

オットマンの上に響は正座し、まじまじとジョンのペニスを見つめた。そしてすっとお辞儀をする。

その美しい姿にジョンは見惚れた。

「……相変わらず礼儀正しい子だね。いつもなんでペニスにお辞儀をするのか分らないんだけどさ」

「ペニスにお辞儀をしているんじゃないかと！ これから性交するから、お前に挨拶をしているんじゃないか！」

「そうだったのか。私はてっきりジュニアに向けて挨拶してるのかと思ってた」

「まったくもう！ 古河家総帥の癖して下品なんだから！」

「いやだってさ、君、いつも私のジュニアをじっと見つめているから誤解もするヨ」

「そ、それはその……お、お前のペニスが……その大きいから……いつも入るのかなって……」

響はしどろもどろになりながら、横を向いた。

「いつも入れてるだろう？」

「うん……」

コクリと頷くと、響は両手でジョンのペニスを撫でた。

温かい。

響は口に溜めていた唾液をつうつとペニスに垂らし、先端にキスをする。そこから一気に喉の奥まで太い肉棒を含んだ。

「うっ……！」

ジョンが悦楽の声を漏らす。

響は感覚を舌に集中させた。

怪しく蠢く舌をペニスに絡ませる。味わいながら舌で刺激をする。

久しぶりのペニス。響の瞳が喜びに溢れ、優しく淫靡な輝きを放つ。

「ちょっと響……っ！ 君の口って相変わらず……いい」

響が首を少しかしげる。愛らしい瞳でジョンを見た。

こういう所は初めて会った子供の頃と変わらないな、とジョンは思った。

純情で、だけど底なしの淫乱で。

感じやすくて。愛らしくて。

神の舌が素早くジョンの裏筋を刺激する。強く、強く、さらに強く。

ジョンの息が早まってきた。

その時、バトラーがずっとスマートフォンを手にした。画面を見ながら彼は縦皺を作り、少し困ったような表情でジョンを見た。

ジョンは、はっ、はっ、と息を荒げながら、左手でバトラーを呼ぶ。

バトラーは黙ったままお辞儀をし、ジョンに近寄りスマートフォンの画面を見せた。

ジョンはにやっと笑い、窓の外を見る。その視線の先には伊藤苑本社ビルがあった。

「手出し無用」

「かしこまりました」

バトラーはお辞儀をし、また部屋の隅へと戻っていった。

響は気になってちらっとジョンを見たが、自分はもう昔のように仕事に口を出せる立場でも、聞ける立場でもないと思い、視線を戻した。

「響……いいよ、気持ちいい……さあ、君のアナルを解して」

ジョンはローションを響の手に沢山垂らす。

響はずっと後ろの夜景を見た。視界に広がる夜の新宿。静かなビルの向こうに明りが点いた伊藤苑本社ビルが見える。

「あの……ここで？」

「そう。東京都民の皆様には挨拶をしなくちゃネ。美しい響。私の恋人・名波響です。淫乱な研究員……いや、研究員助手なんですってね」

「入社試験に落ち続ける私へのイヤミか」

そう言って再び響は夜景を見る。

この夜景の向こうには弟がいる。今、寝ずに仕事を進めている真面目な弟が。伊藤若葉。彼の明るい笑顔を響は思い出す。きつとおっちょこちょいな弟はPCに向かい、欠伸をしながら資料作成をしているだろう。

弟が仕事をしている職場の近くで、伊藤苑次期社長と期待される兄は裸になり、ライバル会社

に勤める男の勃起したペニスを前にしていた。

響は真っ赤になりながら舌を伸ばし、ジョンのペニスを舐めた。

そして自分のアナルと、その奥へとローションを塗った。

「っ！」

アナルがひくつく。まだジョンのペニスは挿入されないのかと、愛を待ち侘びている。

「あ……」

響が悩ましい声を洩らす。

「響、ほらもっと腰を上げなさい。都民の皆様から見えないだろ？」

「え？　ここで？」

「そう。ちゃんと二本ずつ、四本入れてクパアって広げるんだヨ」

「何がクパアだ。くだらない日本語ばかり覚えやがって」

「くっくっくっ、私は日本人だヨ、響」

「知ってる」

「早くおやり。恥ずかしがり屋さん」

ジョンが響の耳元で囁く。

響はオットマンから片足を下ろした。そして腰を高く上げる。

透き通るように美しいガラス窓の向こうに広がる都心の夜景。空中でセックスをしているような幻惑の景色。

くちゅ、くちゅと、アナルを弄る音がする。そしてぺちゃ、ぺちゃというペニスを舐める音も。

。 バトラーにも聞こえているのかと思い、響はちらっと彼を見た。彼はいつも通り能面のような柔らかい笑顔を浮かべながら立っていた。

「響……そういえば君、バトラーに手を出そうとしただろ？」

「ああ。お前が来ないから抜いて貰おうと思った」

「全く……。私だって我慢をしているんだから、君も我慢したまえ」

「我慢してるの？」

響は不安そうに上目使いでジョンを見た。

子供っぽい不安そうな視線にジョンはドキっとした。

「ああ、もちろん。君に約束しただろ？　他の人とは寝ないってさ」

ジョンが響の髪に優しくキスをした。

響は嬉しそうに微笑む。

「うん、我慢する」

「いい子だね。さあ、皆様にご挨拶をしなさい」

ジョンの強い命令口調。別に抵抗する事も出来る。このまま帰る事も。

響は束縛されているわけではなかった。レイプされているわけでもない。

これはプレイの一環に過ぎない。

窓の外、伊藤苑本社にアナルを向けて、恥ずかしい格好をするというプレイなのだ。

するもしないも、選択権は響にあった。

「……………」

響は黙ったままアナルに両手の人差し指と中指を入れた。四本の指。こくりと喉が鳴る。ぬるぬるしたアナルの内壁に指が触れる。

少しずつゆっくりと、ゆっくりと広げる。空気がアナルの奥へと入ってきた。

「ガラスに映る君の姿が美しいよ。もっと広げなさい。伊藤苑の皆様に見えるようにね」  
コカの優しい声と真逆な残酷な言葉。

もしこのような恥ずかしい姿を徹夜し、一生懸命仕事をしている弟に見られたら……。

響は真っ赤になって手を止めた。

「もっと……響、もっと広げなさい」

「……………」

「私は知っているんだよ。君が見られると感じるっていうのをね。ほら、想像してごらん。伊藤苑のビルから見られている自分の姿を」

「そんな事を言わないでくれ。恥ずかしい」

「恥ずかしいのは君の体だろ？ ほら、こんなにギンギンに勃起させちゃって。開きなさい。もっと」

コカはにこやかに微笑んだ。

響はゆっくりと愛孔を広げていく。

「さあ、ご挨拶は？」

コカが響に囁く。

響は真っ赤になりながら、伊藤苑本社を見つめた。

「……古河・C・ジョンの恋人、名波響です。伊藤苑で研究員助手をしています。淫乱でアナルファックが大好きです」

「伊藤苑の皆様、響のいやらしいアナルを犯してくださいはい？」

「……い、伊藤苑のみ、皆様、響のいやらしいアナルを犯してください」

「よく出来ました。じゃあその体勢のまま、舐めて」

「はい……」

響は窓に向けてアナルを広げたまま、ジョンのペニスを咥えた。にゅぽ、じゅぽ、という音が部屋に響く。

東京の夜景に重なるように、響のアナルがガラスへ映る。広げられ、奥の奥までピンク色の孔が見え、男を誘う。

この距離では伊藤苑から見えるわけがない。けどもし見えたら……。徹夜している弟はなんとと思うだろうか。

だがそんな想像すら響のペニスを興奮させる一因にしかならなかった。

響は愛する弟に視姦される空想を抱きながら、恋人のペニスを咥えるのだった。

★

伊藤苑本社。社長室。

パソコンの前に座り、夜中まで仕事を進める伊藤社長はふと疲れ、社内の防犯カメラを覗いた。

防犯カメラからは廊下などを映す事も出来るが、伊藤社長が見るのはもっぱら息子達がいる研究室である。

研究の進捗状況や社員の素行をチェックするという意味合いより、ただ息子達の顔が見たいという親バカな動機に過ぎない。

映し出された研究室。そこには初めて会社で見る、長男響の寝顔が映し出されていた。

伊藤社長の顔がほころぶ。廊下ですれ違う時はいつも厳しい顔付きの息子。少し睨んだような厳しい視線を送られ、すっと頭を下げられる。そこからはもう響の顔が見られない。社員としては至極当然の態度だろう。百点満点だ。だが親子なのだ。少しぐらい笑顔を向けてくれてもいいだろう。全く家に帰っていない駄目な父親だ。嫌われても仕方がない。そう思っているもやはり寂しい。

(美しい子に育ったなあ。少し私に似ているか?)

伊藤若葉と後ろの研究員助手が響の噂をしている。

(若葉も一気に綺麗になって。円君のお陰かな? 響は.....ふう.....ジョンの手腕か)

伊藤社長は響の顔をアップにする。

(長い睫毛だ。美しい鼻筋。きめの細かい肌。赤い唇。色っぽくてそそる顔だ。重役達に見られたら個室に連れていかれて悪戯されそうだな.....まあ私の息子だから、手出しはしないと思うが。だがもし響が他人の子供だったら、私でも手を出したくなりそうだ)

伊藤社長は防犯カメラ映像のファイルをコピーし、『響』ファイルに入れた。

カメラに部屋全体を映し出すと、社員達がざわついている。

(あんなに響が無防備な姿を曝け出していたら、誰だって襲いたくなるよな)

伊藤社長はくくくっと笑った。

(全く.....ジョンめ、こんなに色っぽく成長させてどうするんだ。まあ、コンビニ業界のお偉方さん達は手を握るだけで即、墮ちそうだな)

モニター内に映る響が起き、社内を見渡す。それから席を立った。

(あ〜あ、いつものクールな響になってしまった。もっと子供の頃みたいなかわい〜視線を向けてくれないだろうか。お父様は寂しいよ)

それから伊藤社長は暫く考えた。

(響がこんな時間に帰るなんて.....おかしいな。少し追いかけてみるか)

伊藤社長は戸棚の中から天体望遠鏡を出した。セットしながら防犯カメラで響の姿を追う。アップになった画面にスマートフォンが映し出される。

(ふん、ジョンからのラブレターね。奥さんは響とジョンの関係を推している。それが実態大きな利益を生んだのは事実だ。だがこんなに愛し合ってしまったらどうするつもりだ。奥さんも.....)

響も)

望遠鏡にビデオをセットする。

(不幸になるのは響なのに.....大切な私の息子なのに.....)

そう言いながら伊藤社長は望遠鏡の向きをHホテルの最上階にセットした。

★

Hホテルの最上階に灯りが点る。

(ビンゴ! おお、響だ。.....バトラーを誘ってるよ.....。いつも澄ました顔付きをしているけど、結構淫乱な子なんだな。風呂か。見えなくて残念だ)

その時、ヘリコプターの音が聞こえてきた。

伊藤社長は目視で確認する。

(赤いヘリコプターか。古河家の自家用ヘリだな。ジョンの奴、すっ飛んできたのか.....結構響は愛されているな)

伊藤社長はふっと笑う。

まだ結婚する前。何度かジョンに誘われ別荘に行った思い出が脳内に蘇る。その時はまだ若くて幼くて、セックスがどういうものなのか知らなかった。

仕事に行き詰まった時、よくジョンと二人でバーで飲んだ。ジョンは惜しげもなく知恵を与えてくれて、それにより伊藤社長は何度かピンチを乗り越えた。

(あの甘い夜。激しい愛撫。夢中になりそうな.....)

妻もいる。可愛い子供が二人もいる。仕事は順調だ。

それなのに自分は、帝王に溺愛される息子に軽い嫉妬を感じ、またいつも自分には冷たい息子が優しく微笑む、ジョンに嫉妬する。あの息子の笑顔が欲しいと願ってしまう。

(子供に微笑まれるような良い父親ではなかったけどな。職場に寝泊まりして、ほとんど家には帰っていなかった。父親としては失格だ)

伊藤社長は部屋の外に『就寝中』と掲げ、鍵を掛けた。そしてカーテンを閉め、その間から望遠鏡を出す。そのままズボンと下着を脱ぎ、コンドームの用意をした。

Hホテルのベッドルームに響とジョンが裸のまま現われた。

望遠鏡を覗きながら、伊藤社長はゆっくりとペニスに触れる。

響が窓に尻を向けたままフェラチオを始めた。ピンク色のアナルと、柔らかそうな陰囊が見える。

(響の.....)

伊藤社長はゴクリと唾を飲み込んだ。

その時、バトラーがジョンに近寄り、何かを見せる。

次の瞬間、望遠鏡越しにジョンと目が合った。伊藤社長はにやりと笑う。

(覗かれている事に気付いたか.....。屋上にでも監視用SPでもいたのかな。まあ、いるだろうな)

ジョンは響に何かを囁いている。

響がちらっと夜景を見る。

伊藤苑本社までの距離は遠く、一瞬では分りにくい。

それから響はあろうことか、窓に向けてお尻を上げて、指を四本入れて.....広げた。

伊藤社長の望遠鏡には広げられた響のアナル、そして美しいピンク色のぬるっとした孔が映し出された。

(.....！！)

伊藤社長の右手が素早く上下し、ペニスをシゴク、シゴク、シゴク。

(クソッ！ ジョンのやつ、仕掛けやがって！ .....可愛いじゃないか.....！！)

美しい息子が顔を真っ赤にし、肌をピンク色に染め、何かを呟く。伊藤苑.....と言ったような気がする。

(ジョンが恥ずかしい口上を響に言わせているに違いない。伊藤苑本社ビルにいらっしゃるお父様、私を犯してくださいとか.....！！ クソッ！ うちの息子、可愛い過ぎる！ それに綺麗過ぎる！)

伊藤社長は息を荒げた。

「はあ.....可愛い、可愛いよ響.....素敵だ.....犯したい.....たまらない.....そのアナルに私のペニスを入れたい.....ぶち込んで掻き回して響、君の中に出したい.....もっとその指でアナルを広げてくれ.....もっとその愛らしい瞳で私を見てくれ.....その口でペニスを咥えて欲しい。舐めて欲しい.....お父様って可愛い声で昔のように呼んでくれ.....響.....響.....」

★

「ね、ねえ.....ジョン.....恥ずかしいよ.....誰かに見られているみたいで.....」

「見られていたらどうなの？ ペニスをこんなに膨らませて興奮してサ。可愛いねえ、君はこんなにシャイなのに体は正直だ」

「こ、これは.....その.....」

響がぺろり、ぺろりとジョンのペニスを舐める。硬く、熱く、燃える。

「ほぐれたかな？ さあ、ガラスに手を置きなさい」

「はい」

響は夜景を見ながらすべすべしたピンク色の尻をジョンに向けた。

美しい東京の夜景。

輝く夜空に裸の響とジョンが映る。新宿の街を歩いていたら誰もが振り向く美丈夫だ。しかし車かヘリコプターで移動するジョンが街中を歩く事はない。

「綺麗な夜景だ。君の瞳のようだね」

ジョンのペニスがぬるぬると響のアナルを刺激する。

「はっ.....！」

響が腰をうねる。快感から逃れるように、腰を引く響。

そのピンク色の腰をジョンが片手で押さえた。

ぬぬ、ぬ、と何度もペニスの先端が響のアナルを刺激する。

響は後ろを振り返り、ジョンのペニスを見た。

「……………相変わらず……」

「相変わらず、なに？」

「……………」

響が真っ赤になって俯いた。

「言いなよ、恥ずかしがり屋さん」

「お、大きくなって……」

「そのビッグコックをいつも受け入れているのは君だろ？」

響が小さく頷く。

「ふふっ、君ぐらいだよ。あんなに長時間受け入れても壊れない子はさ。それもどこまでも貪欲に求めて、しゃぶって、啜えて、決して離さない。それどころか私が先に満足しちゃうなんてね」

ジョンがそっと響の背中にキスをする。

「なんでこの細い腰で、そんなに耐えられるのか不思議だよ。お尻、広げて。愛らしい蕾を巻き込まないようにしないとネ」

響はジョンの言う通りに、両手で尻をくいと広げた。

「いいこだネ、響」

ジョンが一步前進する。

ぬぬい……とピンクの花弁が広がった。

「ああ……っ！！」

ガラスに胸をぺたあと付け、お尻をくいとジョンに向けながら、響は声を上げた。

両方の乳首がガラスの向こうにいる新宿を誘惑した。

★

伊藤苑・社長室。

「はあ……！ はあ……！ はあ……！ 響、なんて愛らしいおっぱいなんだ……！ あんなにガラスへと押しつけて、いやらしい顔をして……！ 腰を押さえられたね。もう逃げられない！

どこにも逃げられないよ！ お父様のペニスからはね！」

むせ返るような栗の花の薫り。ゴミ箱の上に処理されたコンドームが捨てられている。

望遠鏡の向こうには名波響がいた。

喘ぎ、恥じらい、腰を振る。

ジョンのペニスに怯えながら、待ち遠しそうに瞳を潤ませる。

「ははっ！ それにしても響は凄いな。連日徹夜続きでジョンのペニスを啜えるのか！ 私なん

て三日は腰が痛かったぞ！ それだけジョンに調教されているって事かな。ふふっ、明日、どんな顔付きで出勤してくるのだろう。あんな色っぽい顔で出勤してきたら、研究員達がセックスの事しか考えられなくなってしまうぞ？ ははは、まったく悪い子だな！ .....そろそろか」

伊藤社長の瞳が意地悪く輝く。望遠鏡に設置された録画機能が、響の美しいよがり姿を記録していった。

★

「はっ.....」

広がる。

「あっ！」

さらに広がる。

「やっ.....！ ああっ！」

体から老廃物を出すために備えられた孔が漢に広げられていく。

中から外へ、ではなく外から中へ。

熱く太い肉棒が侵入していく。

「ひい.....いあああああああああああああ！！」

腰を押さえられたまま、響が仰け反る。

「イイネ、この挿入した時の声、最高だ」

「あっ.....あっ.....ふ、ふと.....ひろ、ひろがっちゃ.....」

「もっとゆっくり愛撫したい所だけど.....ネ」

ジョンは激しく腰を動かし始めた。

「ひいいいいいいい！ はひい！ はひい！」 肉と肉がぶつかる音が鳴り響く。

響は空を見つめながら、口をぱくぱくとさせた。喉の奥から胸の奥から息が出る。声が出る。悲鳴が上がる。

体を貫かれているような感覚。

「串刺しになっちゃう！ ジョンに奥まで刺されちゃう！」

「もっと刺してあげる」

ジョンは両手で響の両腿を持ち上げ、ぱかっと足を広げさせた。

「ひいいいいいいいいいいいいい！！」

ガラスの向こうに広がる新宿副都心。その夜景に浮かび上がる両足を広げられ、ペニスを勃起させ、イヤらしい汁を垂らしながらライバル会社の男に串刺しにされている名波響。

伊藤苑の次期社長になるべく教育され、エリートコースを歩むべく努力してきた青年は、色っぽく瞳を濡らし、涎を垂らして淫猥に乱れていた。誰よりも太く長いジョンのペニスをアナルに啜えて。広がって。広がって。広がって。広がって。奥まで。ずっと奥まで。

ジョンのビッグコックを.....根本まで！

「いやあああ！ 壊れ.....ちゃう！！ お尻、壊れちゃう！！ 頭、壊れちゃう！！」

「この程度で壊れるお尻も頭も持ってないくせして。君に求められて精を吸われて、壊れるのは私だよ」

「あんあんあんあんあんあん！！」

ジョンの手がリズムカルに動き、響の体を浮かし、また沈める。

勃起したペニスに触れ、自らを慰めようとする響をジョンが止めた。

「後ろだけでイキなさい。伊藤苑の皆さんにアナルだけでイク、えっちな響を見せるんだヨ」

「いやっ！ 意地悪な事を言わないで！」

「ダメ。ほら、響。ご挨拶しなさい。『伊藤苑の皆様、見て下さい。アナルだけでイク、貴男の名波響です』って」

「い……伊藤苑の皆様、見て下さい。アナルだけでイク、貴男の名波響です……」

「『淫乱なお兄ちゃんです』って」

「い、いん……らんな……お兄ちゃんです……あっ……！ はんっ！」

その瞬間、響のペニスが華やかに絶頂を迎えた。夜景に白いスペルマが散華する。

肩で息をする響にジョンが意地悪く囁く。

「どうするの？ こんなイヤらしい姿を若葉君に見られてしまったら……。赤ちゃんみたいにお股を開いて、お漏らししちゃってサ」

響は真っ赤になって俯いたまま、答えなかった。

「さあ、響。朝まで時間がない。続きはベッドでしようか」

ジョンは響を抱き抱えたまま、ベッドへと向かった。そしてちらっと後ろを振り向き、勝ち誇ったような瞳で伊藤苑のビルを見つめるのだった。

★

再び伊藤苑社長室。

「……うっ！！ ……はあ、……はあ……」

脱力しつつ、伊藤社長は望遠鏡を覗いていた。目の前に広がる息子のスペルマ。恥じらう響の顔。勃起した乳首。発射した直後だというのに、まだエネルギーを感じさせる息子のペニス。

伊藤社長は精液が溜ったコンドームを結わいて、ゴミ箱へと投げ入れた。

ぐったりとする響を抱えてベッドに向かうジョンが、勝ち誇ったような顔でこちらを見る。

不思議にも目が合った……ような気がした。

「……ちっ。あのやろう」

二人の姿がベッドへと消えると同時に、Hホテルの赤いカーテンがゆっくりと閉まっていった。

伊藤社長はベッドに横たわりながら、肩で息をした。いつも社内監視カメラの向こうで、廊下で、冷たい視線を向ける響が初々しく恥じらい、まるで父のペニスを咥えたがっているかのように口を開き、乳首をガラスに押し当て、股を開き、ジョンの（父の）ペニスに犯され、喘ぎ、乱れ、声を上げ、頂点へと達して。ガラスにスペルマを撒き散らした。

「……最高だ」

自分の息子はこんなにも美しいのだと世界中に自慢してやりたい。大きな声で言いたい。だが社内でそれは極秘事項だった。

伊藤社長は少し考え、寝返りを何回か打った。

「そうだ！ 明日社員食堂で響に会おう。あの美しい響を見れば重役も響を次期社長に推すだろう。……そのためにはまず社員にならないとだな。若葉を教育係りに任命するか。うん、いい考えだ。伊藤苑の社員になれば、響もコカへ転職する気を失う……」

そこまで言って、伊藤社長は悲しそうな目をした。

「伊藤苑を受けなさいと言った日、初めて響が私に反抗したんだっけな。もう少しコカの所で修行させてください、お願いしますと懇願された。そう……初めて……響が……」

伊藤社長は望遠鏡のVTRを再生した。

ジョンに愛され、震え、涙を流し、幸せそうに微笑む息子の姿が映し出される。

「奥さん……どうするんだよ。響は……こんなにもジョンを愛してしまったよ……」

ビデオには優しく微笑み、悦楽の表情を浮かべるジョンも映っていた。伊藤社長はジョンの表情をアップにする。

「……あ～あ。古河家総帥がこんな表情をしちゃって……。恋しちゃってるの、バレバレだろ。ああ、そうか。だから響用のSPを研究室に置かせてくれって言ってきたのか。響自体がもう古河家の重要人物になっているんだ」

伊藤社長はビデオを止めた。そこに映る息子と、その恋人。微笑む二人。

「まったくどうなることやら」

伊藤社長はデータを小型HDDに移すと、息子の将来を考えながら眠りについた。

★

ふっ、と響は目覚めた。時計を見ると起床時間まであと5分。

横には愛するジョンがいる。響はジョンの脇の下に潜り込み、眠っていたようだ。

昨日の激しいSEX。何度も何度もドライオーガズムの快感を与えられ、脳が沸騰するまで愛撫された。乳首を痛い程摘まれ、前立腺と同時に刺激されて、また、また、さらに。明日仕事だから、と何度言ってもジョンは響を離さなかった。響の体が求めるままに、ジョンは快楽を与え続け……それがほんの45分前だ。

(全然、眠れていないじゃないか！)

そう怒りを覚えながらも、響はジョンが愛おしくて堪らなかった。今も、一分一秒でもジョンを愛したい。響はすつと体を起こし、ジョンの下半身に顔を埋めた。

「……ん……んん……」

彼を起こさないように、静かにビッグジュニアを愛撫する。舐める。舌を這わせる。強く。もっと強く。また優しく。口に含んで、袋を撫でて……エレクトさせる。

ピッ！

腕時計のアラームが一瞬、音をたてた。

(起床時間か.....仕事に行かないとだな。若葉達が待っている)

響は優しく微笑み、ジョンのペニスに、ちゅっとキスをした。

「愛してる」

小声で囁くと、響はベッドから降りようとした。

「ちゅっとまで！ 響！」

その瞬間、響は後ろからジョンに抱き抱えられ、ベッドへと引きずり込まれた。

「あ、起きたんだ。おはよう、ジョン」

「おはようじゃないよ！ 響！ 私の息子をこのまま放置して会社へ行くつもりかい！？」

「.....もちろんそのつもりだ」

「マイガー！ 君は本当にいつもクールだ！ だがね！」

ジョンは響の上にのしかかった。

「私はホットなんだよ。責任を取ってもらおうか」

ジョンが意地悪くにやりと笑う。

響がさあっと青くなる。

「ちょ、ちゅっと待て。今日はもう仕事に行かないとだ。それにお前のジュニアはでかくて.....  
腰が.....」

「学生時代は朝までやって、学校に行ってただろ？」

「あん時はもっと体力があったんだ！」

「今だってあるだろ？」

ジョンが響の両足を持ち上げる。

「ちゅっと！ おい！ マジで冗談はよせ！ うちの明日が研究成果発表の〆日なんだよ！  
無理！ 今朝は無理だって！」

「ほんの45分前まで私のジュニアを銜え込んでヒーヒー泣いていたくせに」

「だから！ 今は体を休ませないと！ 腰が立たなくなるだろ！」

「いいじゃない。伊藤苑研究室のNo.2である名波響が〆日の前にセックスのやりすぎで判断力が  
落ちるとか。我が社にとっては最高のサプライズだ」

「ばかやろう！」

「悪戯したのは君だろ？」

ジョンがふふっと笑った。

響が真っ赤になる。

「.....そ、それは.....あぁっ！！ はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんん！！」

「求めたのは君だよ、響」

ゆるゆるのぬめぬめの蕾。

体の奥へと入ってくる熱い愛欲。

何度も突き刺さる快感。抓まれ、赤く腫れる乳首。

「ひいあ！ やあ！ やだ！ ダメ！ 感じる！ ジョン！ ダメ！ 奥！ 来ちゃダメ！ 立てなくなっちゃう！ 頭が.....また！ 沸騰しちゃう！ いやらしい子になっちゃう！ ダメ！ ひゃん！ ひゃん！ ひゃん！ あああああああああああああつ！！」

「相変わらず可愛い声で鳴くねえ。伊藤苑の皆にも聴かせてあげたいよ、本当」

ジョンは響のペニスをローションを塗った手で扱いた。

「やああああああああつ！ ああつ！ ジョン！ ジョン！ あ、あああ、ああああ、愛して.....るっ！ はうんっ！」

「愛しているよ、響。君だけを。永遠に.....」

熱い欲望は響の秘所へ、ドクンツ.....と放たれた。

★

シャワーを浴びた響が、半袖のシャツに腕を通す。

「.....」

「なに？」

着替えをじっと見つめるジョンに、響が冷めた視線を送る。

「.....アンダーシャツは？」

「暑いから着ていないが？ お前、毎年うちの会社に来てるだろ。あの暑さの中でアンダーシャツとか着てられるか」

「伊藤苑って節電し過ぎだよネ」

「.....311以降、さらに夏場のエアコン温度が上がったんだよ。放射性物質測定器やらなんやらで経費が一気に上がって脱原発、省エネってスローガンでな」

「凄いな。験者のようだ」

「験者じゃない。研究者だ」

「うちはチェルノブイリの時から放射性物質測定をやってたから検査体勢に変更はなかったけどネ」

「うるさい、セレブ野郎」

響はベルトを止めた。そしてカップに入った『紅茶華伝 香る桜』をぐいっと飲む。

「お陰でいつも以上に円さんが腰タオル姿だ」

「それで.....ね」

ジョンは響をじっと見つめた。

白いシャツから透ける赤く膨らんだ乳首。首筋や襟元や腕に残るキスマーク。抓った痕。

潤んだ瞳。何度も愛を重ね赤く濡れている形の良い唇。フェロモンの漂う汗。しっとりとした髪の毛。発情したままの、ピンクパールのごとく輝く肌。

(自分がこんないやらしい姿をしてるって、響は気付いているんだろうか?)

響が急にジョンを見つめた。

その寂しげな瞳に、ジョンの胸がきゅんっと締め付けられる。

「.....またな」

「.....」

(またな、か。昔には言われなかった言葉だ。行ってらっしゃい、行ってきますってお互い、挨拶を交わしていて.....)

ジョンは無言のまま、肩をすくめた。

響は鞆を持ち、頬を染め、俯く。

「.....行ってくる」

その瞬間。

ジョンは後ろからぎゅうっと響を抱き締めた。

「行っておいで。そしてまたここへ帰っておいで。私の元へ。愛しい響」

「.....ひ、暇な時にな」

「うん」

「.....愛してる、ジョン」

「愛してるよ、響」

二人は少しの間、唇を重ねた。

とても色っぽい瞳で、響がジョンを見上げる。重なる二人の視線。

「.....お前とのセックス、最高に良かった」

言った瞬間、響は真っ赤になり、行ってくる！ と言い放つと、愛の部屋から出て行った。

ジョンはしばし呆然として、それからくっくっく、と笑った。

「言うねえ。響も大人になったもんだ」

「そうでございますね」

バトラーが静かに微笑む。

「昨日はお前、よく響の誘惑に負けなかったな。褒めてやる」

「ありがとうございます。私共ならともかく、ハウスキーパー達ではころっと響様の誘惑に負けてしまいますよ」

「そうだな。本当に淫乱な子で困る。一応昨夜、響には釘を刺しておいたのだがね。あの子、自分が淫乱な自覚があまりないからな。

.....またここに戻ってきてくれるだろうか」

「来て下さいますよ。今回はマスターがいなくても、響様はこの部屋の主人として帰って来てくださったではありませんか」

「.....そうだな。一步前進だ」

ジョンはぐっと手を握り、にっと笑った。

「さて支度をして、伊藤苑の社食へ昼ご飯を食べに行ってくるか」

「かしこまりました。スケジュールを変更しておきます」

カーテンがするすると自動的に開く。

「覗き魔の伊藤ちゃんにも挨拶をして来なくちゃね」

ジョンはコーヒーを飲みながら、朝日に照らされた伊藤苑本社ビルを見つめるのだった。

(終り 2012/07/14 脱稿)

あとがき

---

こんばんは。

今回は金曜日に上げられなかった藤間紫苑です。

この後、『伊藤君と円先輩』社食シーンへと続いていきます。

▼180本目『お～～いお茶 2012年九州産新茶』 <http://drink110.blog29.fc2.com/blog-entry-198.html>

響とコカのHシーンはもう少し書きたかったかなあとか、ちょこっと心残りはありますが、ここから暫く本篇が続きます。

次に描くのは響とコカの出会いになります。

多分半年後とかになると思いますが、応援を宜しくお願いします。

次回は……[三鳥井と響のSS](#)？

[魔法のいらんど](#)で連載していますので、こちらもよろしくお願いします。

ではまたイトマドで！

藤間紫苑

2012/07/14

## コカアディクション5 ベルガモットに魅せられて～三鳥井寿篇

ベルガモットに魅せられて～三鳥井寿篇

饗宴後。

三鳥井寿はベッドに横たわりながら、響の吐息を聞いていた。

目をうつつらと開き、彼の姿を盗み見る。伊藤若葉の向こうに、コカの胸に抱かれながら響は眠っていた。

手を伸ばせば彼の髪に触れられる。あの柔らかい髪に。つい昼間まで触っていたはずなのに、今はやたらと遠く感じる。

こんなに夢中になるなんて思っていなかった。何人もの男や女を、いや性別を超越した者も俺は手玉に取って恋愛ゲームをしていた筈だ。

恋？ 馬鹿ばかしい。三鳥井寿が本気になるわけがない。そう、なれるわけがないのだ。

寿は自問自答をしながら響を見ていた。他の男なら奪ったに違いない。この世で一番手を出してはいけない男に執着を感じてしまった。

決して手を出してはいけない古河・C・ジョンの恋人・名波響に寿は堕ちた。

指が疼く。響のアナルが指に絡みついた感覚が忘れられない。

指が犯される。舐められ吸い込まれ、もっともっとと淫猥に絡みつく。初めてだった。何人ものアナルに触れたが指が犯される事はなかった。主導権はいつも寿にあった。響相手でも響をイカしたのは寿だった。

しかし。

寿はたった数秒間響のアナルに触れただけなのに、その感触に嵌まった。夢中になった。

もっとあれを。もっともっとと脳が叫ぶ。柔らかくうねる、そして力強く指を愛撫してくるアナル。

桃色に輝く肌。甘く切ないベルガモットの薫り。また二度と忘れられない響のイキ声。

手を伸ばして響にキスをしたい。押さえ付けて胸をしゃぶってあの声を聞きたい。この手で口で、そしてペニスで響を犯したい。あの指に感じた快感がペニスに纏わりついたら……そう考えるだけで一気にジュニアが堅くなる。

くそっ！

心の中で呟き、寿はペニスに手をやった。ここで自慰をし、発射した日には希鈴に何を言われるか。

だが。

どうしても寿は忘れられなかった。あの神秘的なアナルの感触。響の美しい声色。イクときの表情。

そして。先程嫌みたらしく何度も見せ付けられた、コカに征服された響のイキ顔。

コカの手により感じて、幸福の絶頂にある響を何度も繰り返し見せられ、寿は敗北感に包まれていた。

お前は一生、こんな風に響をたのしませる事は出来ないだろう？ そう言ってるコカの挑戦的な瞳。

そして響の後ろで息を荒げ、神のアナルを味わっているドリンク業界の帝王。

コカは何度も響の中で射精していた。

その度に響の感度は良くなり、最後は……見た事もない程色っぽく狂っていた。あの嬌声。

これから響は社会生活に戻れるのか？ と一瞬心配になったぐらいだ。

帝王に愛され、抱かれ、狂わされ。しかし響は幸せそうに見えた。寿の手、ではなくコカの手によって幸福を感じて悦んでいた

。

部屋の隅を照らす小さな灯りが華麗な者達を照らす。

このジュニアをどうしようか。

寿は上を向いてちらっとサンガの姿を横目で見ると。

綺麗な顔立ち。さぞかしモテまくってきただろう。

でも萌えねえんだよなあ。

少女のようにも見えるこの青年を響はどうやって犯したのだろうか。

あのドリンク業界のパーティーがあった夜、サンガはホテルの一室に連れ込まれ童貞を奪われたという。

サンガにしてみれば若葉に恋をした瞬間、無理やり犯され初物を奪われたのだ。

やりきれない思いも、屈辱もあっただろう。

同情してやりたいとも思う。

そう、相手がこの響でなかったら。

今では同情どころか、このか細い青年に三鳥井寿とあろう者が嫉妬し、めちゃくちゃにしてやりたいと思ってしまう。

どうやって響の口を味わったのか。

どうやって響に愛撫されたのか。

響のベニスを受け入れたのか。

世界中のセレブ達が金を積んで抱きたがっている名波響。

コカの恋人というアクセサリ的な意味ではない。コカが夢中になっているその性技を堪能したいのだ。

特に有名なその舌使い。

フェラの技。

あの大富豪であるRですら求める幻のセックス。

それをまあ、こんな細っこい男に惜しげもなく与えちゃうなんてな。響も罪作りな奴。

寿はふっと笑った。Rが知ったら嫉妬からサンガは明日にでも四肢を切断され、バンビの剥製のように壁へかけられかねない。

こいつが馬鹿みたく吹聴しないといいけど。

綺麗なサンガの顔を見ても埒があかない。

大同と寝たら恋だの愛だのうるさそうさ。

希鈴、あさひ、れもんは後々面倒な事になりそうさ。

ちらっと円青樹を見る。

綺麗だあ、と寿は頬を染める。

ああ、この男に抱いてもらったりフ、フ、フ、フェラをしてもらったら、もうその視線だけで達してしまいそうだ。髪から潮な香りがする。ワイルドで漢らしい。

しかし彼の腕には極上の寝顔を浮かべる伊藤若葉がいた。

はあ、と寿は小さく溜息を吐いた。

全く。幸せそうに円さんに抱かれちゃって。

寿はふと若葉をじっとみた。

円さんが若葉君のフェラを妙に誉めていたな。

女神の舌をもつ女帝の孫である響と若葉。まさか、若葉も名波のようなフェラが出来るとか？  
考えてみれば名波より、若葉のほうが味覚センスが抜群に良い。  
もちろんコカに育てあげられた響にはまだ到達しないだろう。しかしこの先、円青樹が育てたら？

寿は若葉の寝顔を見ながらペニスに手を置いた。  
格下だからと舐めているうちに、実は最高級の品質を持っていた猫達をコカと円に奪われた。

悔しい。

そう寿は思い、唇を噛む。  
いつもこの二人に先を行かれる。三鳥井家に生まれたという驕りが、ビッグチャンスを二度も逃す結果を生む。

★

あの、響に初めて会ったホームパーティー。  
「三鳥井君。こちらは名波響君だ。パーティーに初参加だそうだよ。同じ日本人同士仲良くしようではないか」  
コカに紹介された美しい少年。繊細で、抱き締めたら壊れてしまいそうな体。  
名波、という伊藤苑グループ女帝の息子が、と寿は思う。  
響の可憐な雰囲気は全く母親に似ていなかった。  
それよりも何故、同じ日系ドリンク会社の息子を、アメリカ資本である古河家の人間が俺に紹介するのか。  
寿は顔には出さず、むっとした。もちろん自分が女帝の立場でも同じ事をしただろう。一番最初に、一番強い奴に挨拶するのは当然だ。だが何故、ジョンがこの少年を紹介して回っているのだ。  
それは誰の目にも「古河・C・ジョンが響を気に入った」と映った。そしてそれは事実だった。  
こんな小さな少年に……と、嫉妬や羨望が混じった視線が響に送られる。女帝はにっこりと笑いながら、響とジョンを見ていた。

「よろしく。俺は三鳥井寿。寿って呼んでくれ。仲良くしようぜ」

「はい。寿……さん。私の事は響とお呼びください」

ガキのくせにちゃんと教育が行き届いてやがる。

三鳥井はふっと笑った。

「希鈴君は？」

「もう大人気っすよ。ほらあの人混みの中心にいます」

「モテモテな子だものねえ。希鈴君！ ちょっといいかな？」

女王のように座り、人々を待らしていた希鈴がむっとして立ち上がる。

「なによ。あたしを呼びつけるなんて。くだらない用事だったら怒るわよ」

この中で一番小さな子が、ピンヒールを履きやってきた。上目遣いでコカと三鳥井を睨む。

「ニューフェイスの名波響君だ。同じ日本人として仲良くやっていこう」

「はっ！ ライバルの間違いでしょ？ まったく。あたしは井上希鈴。響、あんた、こんな毒蛇みたいな男に騙されるんじゃないわよ。頭からぺろっと食べられちゃうんだからねっ！」

「希鈴君はきついなあ」

「ジョン程じゃないわよ。何かかと思ったら美少年侍らせて自慢しに来るとか！」

希鈴は下から舐めるように響を見回した。

響は真っ赤になって硬直する。

「ふうん。名波女帝の息子さんかあ。ぜんっぜんお母様似じゃないのね。あのひょろとした草食系のお父様にそっくり。女帝似だったらもっと仲良くしてあげるのに！ まあ、いいわ。何かあったらあたしを頼りなさい。この色恋しか頭がない二人よりは、的確なアドバイスをあげられるわよ。学校も一緒でしょ？ 困った事があったらあたしに聞きなさい」

「名波響です。ありがとうございます、希鈴さん」

「希鈴でいいわよ。あんたより年上だけどお」

「え！？ そうなんですか！？」

「……あんた、今、あたしの事、チビだって思ったでしょ？」

希鈴が怒りに震えながら響を見た。

「いいえ。あの……小さくってふわふわしててキラキラ輝いていて、愛らしいなあって」

「小さいですってええええええ！」

希鈴はぽかんと響の頭を叩いた。

「いたっ！」

「あたしのコト、チビって言ったら承知しないんだからね！」

あれから寿と響と希鈴は同じ学校という事もあり、よく顔を合わせていた。

ただ寿と響は同じドリンク業界の子供と言っても企業規模が違うため、ほんの少し距離があった。

響はすれ違う時、いつも希鈴とつるんでいる寿に微笑みかけ、挨拶をした。

だがそれは少し他人行儀な感じを寿は覚えた。

寿はいつも美しい少年に惹かれ、振り返りながらも、距離を縮められなかった。

付き合うにはちょっと遠い。かといってセフレとして付き合うには惹かれ過ぎている。

そんな距離感に悶々としながら、寿は響とつかず離れずな関係を保っていた。

「寮長の誕生日に響が呼ばれるそうだよ」

そんな噂が流れてきたのはあの事件の一週間前だった。

「へえ。俺も二年前に呼ばれたぜ」

寿はランチを食べながら言い、無関心を装った。

「名波もやるよな。これでセレブグループの仲間入りだ」

「成績優秀だから、後々囲い込みたいと考えたのだろう」

「誰か響と寝た事ある？」

周囲がシンツとする。

「まさか響ってチェリー？」

寿の脈拍が上がる。

「いいんじゃないの。響のヤツ、あの先輩達の事、好いてるし」

馬鹿みたいな発言を寿はわざとする。

なんとなくそわそわする同窓生達。

「じゃあ寮長達が最初かぁ」

呑気な同級生の言葉。

寿の脈拍がさらに上がる。

「先に誰か食ってしまえば？」

「寮長にレジスタンス？」

「言い出しっぺのお前が食えよ」

「勘弁。俺、寮長達に睨まれたくない」

「そりゃそうだよな」

皆がどっと笑う。

あの白い肌。赤い唇が寮長達に蹂躪されるのか。

寿はふと寮長達のバースデーパーティーの事を思い出した。

まァ、その時彼らは寮長ではなかったが。

押さえつけられ、ペニスを舐めさせられ、乳首に、蕾に、手が伸びる。

何度も何人も幾度も翌日まで続いた饗宴。

別に嫌ではなかった。しかし何度も繰り返される快感に気が狂いそうになった。

しゃぶられ、しゃぶらされ、握って、握られ、入れ、入れられ、ペニスが、パイプが、指が、舌が、エネマグラが快感を引き出す。

過去の自分がいつしか響の姿に変わる。

あの白い肌に先輩達の手が伸びて、押さえ付けられる。

キスをされ、舌を入れられ、服が一枚一枚脱げていく。

象牙のような美しい背中。

先輩の手がズボンに触れる。

ベルトが外され、ズボンと下着が剥ぎ取られ、露わになる下半身。

白くて、ぷりっとした尻。

恥じらう響が後ろを振り返る。

足がゆっくりと広げられて……。

「な～にズボン膨らませて想像してんだよ、寿」

同級生にからかわれ、寿はふっと笑った。

「響の奴を後ろから犯しているのを想像してた」

「ヒュー！ レジスタンスやんのか？」

「まさか。アメリカの市場を失うよ。童貞なんてメンドイ男は先輩達にくれてやる。それからじっくり開発さ」

「やるねえ」

「寿は響と同郷なんだろう？ 日本人だよな」

「ああ、だから手を出しにくくてな。でもバーজনじゃなきゃ、適度に遊べるだろ」

「そりゃそうか。俺も響と寝ようかなあ」

眼鏡君が笑いながら言う。

寿は怒りを抑えながら、言い放った。

「響と寝られるわけがないだろ？ そんときゃ俺にメロメロさ」

そう寿が言うと皆がどっと笑った。

「自信家だな」

「きれいじゃないぜ」

寿は笑いながら部屋を出て、トイレへと向かった。

響の白い項が俺を捕らえて離さない。

あの尻を押さえて……奴のペニスを扱いて……唇で背中にくっつきも痕を付けて……奴の蕾をゆっくりと犯す。

あの赤い唇から漏れる艶声を聞いてみたい。

どんな声をあいつは出すのか。

背中を反って、ケツを振って、俺への……愛を奏でながら……。

「はあ……はあ……は、はっ、あ、あっ……はあ……あ、あ、あっ、っうっ！！」

俺は空想上の響を犯した。

白いスペルマは便器の中へと、散った。

あと数日で響は先輩達に犯される。

やつのチェリーは奪われる。

寿は表情を変えないまま、響の体を空想した。

俺は別にチェリーじゃなかったが、響は絶対にチェリーだ。

あの恥じらいと無防備さ。

寿は彼の肌を妄想しつつ道を歩いていた。

「あっ！」  
「すまん！」

なんという偶然だろうか。

街に響が来ていた。それも俺にぶつかってくるなんて……運命？

「あ、三鳥井さん」  
「俺の名前は三鳥井寿。寿と呼べ。俺はいつも響って呼んでるだろ？」

響が頬を染めて寿を見る。

……もしかして脈あり？

寿は響の顔をじっとみながら、そんな風に考えた。

「寿……君も買い物？」  
「ああ、ペンを買いにきた。お前は？」  
「先輩の誕生日プレゼントを探しにきたんです」

なんとなく寿はむっとする。  
誕生日プレゼントを渡すのは当たり前なのだが、響が先輩に渡すのが気に入らなかった。  
「寿君、良かったらプレゼントと一緒に探してくれないかな」  
「いいぜ。ペンを買ったら暇だからな」  
「じゃあその文房具店に行きましょう」  
「ああ」

何これ、デートじゃねえか？

寿は表情を変えないまま、心の中でニヤついた。  
響が上目遣いで寿を見る。  
「ありがとう」

……可愛い。  
ヤバイ、可愛い。  
響を近くでまじまじと見た事がなかったが、めちゃくちゃ可愛い。  
思った以上に可愛い。

長い睫とか、冷たそうでいて甘い瞳とか、柔らかそうな唇とか。  
「なにか？」  
そう言って響が上目遣いで寿を見る。

誘ってんのか！？ わざとなのか！？  
なんでそんなもの欲しそうな瞳で俺を見るんだ！

いや、ただ単に俺が格好良いからだろう。だから響も興奮しているに違いない。俺が今異様な程、ハイテンションなように、響もきつと。

寿はちらっと響の下半身を見る。

盛り上がり欠けるな……。俺はピンピンだというのに。

「いや、お前、意外とタツパあるんだなと思ってさ」

「うん。最近、伸びてきたんだ」

にっこりと笑うその笑顔。

無防備に体を寄せてくる。

ペンを買ってから、文房具屋を見て回り、二人はあれやこれやと語りあい、最終的に先輩へのプレゼントをスタイリッシュなデザインのブックエンドにするのだった。

「ありがとう。寿……はセンスがいいなあ。私だけだと見付けられなかったよ」

名前を呼びながら、響はちらっと寿の様子を見る。

企業規模的に響は寿を呼びつけには出来ない。

寿がにっこりと笑うと、響はほっとしたように微笑み返した。

「まあな。俺、先輩方と仲もいいしさ。数年前誕生日会に呼ばれた事もある」

「そうなんだ。どんな風だった？」

そう訊く響の顔を寿はじっと見つめた。

朝まで乱交だったぜ。

お前も朝まで……。

そう寿は思いつつ響の体を見る。

いくな。

そう言いたい。

でも言えない。

熱い葛藤が寿の体を駆け巡る。

「買物も終わったし、ソフトクリームでも食べないか？ 美味しい店を知っているんだ」

寿がそう言うと、響がくすくすと笑った。

「寿ってソフトクリームを食べるんだ」

「なんだよ。おかしいか？」

「イメージに合わない」

「お前が好きそうだと思ってな」

「……ん。私は……ソフトクリームが結構好きだ」

響は少し頬を染め、俯いた。

「子供っぽいかな？」

「いや？ 俺は嫌いじゃないぜ。白くて甘くて、響みたいだ」

「なんだよ、それ」

響があはは、と笑った。

俺は普段、ソフトクリームを食べないがな。下心が無ければね。

寿がソフトクリームを買い、響に渡した。

「今日、付き合ってもらったから、俺のおごり」

「私の方こそ付き合っていたのに……でも遠慮しないでいただくよ。ありがとう」

「いやいや」

寿は椅子に座り、ソフトクリームを舐めながら響を見る。

響は両手でコーンを持ち、仔猫のようにペロペロとアイスを舐め始めた。

……………。

どうしたらいいんだよ、このキュートな姿！

写真を撮ったら怒るだろうなあ。

暫く響の姿を見ていた寿は、ふっと彼に顔を近付けた。

「響」

寿に呼ばれ、一生懸命ソフトクリームを舐めていた響が顔を上げる。

その白磁のような頬に。

寿の唇が触れる。

そして舌が。

つうーっと頬から口角へと流れる。

少年達の赤い唇が、ほんの少し、重なった。

響が驚き顔を真っ赤に染め、体を硬直させたまま寿を見つめていた。

一瞬。

それでいて長く感じる時。

二人は触れ合っていた。

唇をそっと、端だけ重ねていた。

まるで恋人同士のように。

寿がゆっくり唇を離し、極上の美しい笑顔を響に向ける。

「お前、ほっぺたにアイスが付いてたぞ」

響は真っ赤になったまま寿を見つめていた。

そして頬に手を置く。

「あ……。ありが……。とう」

「ははは、意外と子供っぽいんだな」

「いや、普段はそんな事はないんだけど……。街に出て緊張してたのかな」

「そうかもな」

やべえ、あの唇、思った以上にぶくっとしてやがる。

こいつ男を誘うなあ。

寿はにやにやする表情を全力で我慢しながら、クールなハンサムフェイスをしつつ、響を見つめていた。

あと数日でこいつの童貞は奪われるのか。

寿はふと、俺だけを見ていて欲しい、などと思ってしまった。

会社の規模的にも、響と一緒にいる事は出来ない。

出来たとしてもそれは結婚ではなく、養子縁組になる。

仔猫のようにソフトクリームを一生懸命食べる響を寿はじっと見つめていた。

あと少しで、こいつは先輩達にやられて……。下手したらセフレとしてキープされる。

そうしたらもう二度と手が出せない。

でも……。そんな事がなくても俺はこいつに手が出せないではないか。

それが三鳥井寿として生まれて来た宿命だ。

会社の決議がなければ、結婚は出来ない。

寿はふっと悲しそうに笑い、ソフトクリームをばくっと食べた。

★

その後、あの事件が起こって、翌日から響とコカが恋人同士だと噂されるようになったんだよな。

先輩達は傷害事件を起こしたとして、グループごと退学になったんだっけ。

コカが響を助けたと、噂になっていたな。

寿は赤い蒲団にくるまって、コカの腕に抱かれる響を覗き見ていた。  
子供の頃の甘さが消えた端正な顔立ち。その淫乱さが全く伺えない清楚で真面目な雰囲気。  
コカが大切そうに腕枕をして抱き締める。

たまに響はくんと匂いを嗅ぎ、何かを探す。  
ゆっくりと移動し、弟の伊藤若葉に近寄る。  
若葉がくんと匂いを嗅ぎ、円青樹の腕を降り、響へと向かおうとする。

それをコカと円が阻止し、ぐいっとお互いの胸へとパートナーを抱きかかえる。  
すると美しい兄弟は、お互いのパートナーの匂いを嗅ぎ、安心の笑みを浮かべ深い眠りに落ちるのだった。

コカと円さんの敵は、最大級の兄弟愛だよなあ。  
寿は薄目で見ながら、心の中で笑った。

★

三鳥井寿はふと目が覚めた。  
薄闇の中、豪華なシャンデリアが浮かんでいる。  
コカの別荘か……。  
近くに手が出せない響がいる。  
憧れの円青樹がいる。

むくりと起き上がり、寿はトイレへと向かった。  
もやもやした性欲と尿意が混ざり合う。  
無駄に豪華なトイレで用を足しながら、寿はオナニーをしようか考えた。

オナニーするぐらいならいっそサングでも犯した方がましじゃねーか？  
……しかし面倒そうだしな。

寿は手を洗い、鏡の前で髪を整えた。

その時。

入口が開く。

入って来た人物を見て、寿は目を疑った。  
名波響がそこにいた。

「あ……」

響が寿に驚き、声を漏らす。そして少しむっとして寿の後ろを通り過ぎようとした。

寿は即座に響の後ろを取り、パジャマを力尽くで引っ張り両腕を背中に固定した。  
そして鏡台へと押し倒す。

「あうっ！」

椅子に白い胸をぶつけ、響は声を上げた。  
「な、何をするんだ、寿！」  
「わかってんだろ？ 今からお前が何されるか」  
寿はぐっと響のズボンをずり下げた。  
すべすべした尻の谷間に咲く薔薇。  
コカが示した愛のアナルプラグ。  
「鬱陶しい」  
「ひっ！」  
寿は強引に薔薇を引き抜き、床に放った。  
ぬるっとしたローションが漏れ出てくる。  
「や……やめて……寿……もうこれ以上、嫌いにさせないで」  
「俺を好きになるか？ 俺の恋人になるか？ 響」  
「……なるわけないだろ」  
「じゃあ嫌われても一緒だ」  
寿は響の濡れた尻にペニスを押しつけ、二度、三度と滑らせた。  
興奮し、勃起するペニス。  
ピンク色に輝く響のアナルに、熱いペニスをあてる。

ふと寿は響を見た。  
押さえている細い腰からずっと目を上げる。  
ピンク色に輝いているすべすべした尻にはホクローつない。  
パジャマで縛った手が動く。そこから伸びる滑らかな腕。  
愛らしくずっと伸びた背中。  
美しい項。  
そして涙に濡れる響の瞳。寿を睨みながらも哀愁を漂わせる。  
美しい男達が鏡に映る。二重のSEX。

ああ、この美しい男はジョンのモノなのだ、と寿はふと思う。

それなのになぜ響は愛らしい誘うような目で俺を見るんだ。  
抱いてくれと、嫌だけど抱いてくれとせがむような瞳。  
涙がこぼれてきそうだ。

響の瞳から。

俺の瞳から。

学生時代、あのちょっとした勇気がなかった時代。  
もし響と寝ていたら、運命は変わっていただろうか。

いや、何度生まれ変わっても俺は三鳥井寿で、こいつは名波響で。  
俺が学生時代、響に手を出す事も、響が俺を誘う事もないだろう。

俺達はライバル会社の子息なのだから。  
俺は理性を失うような子供じゃなかった。  
でも今は理性を失っている。

大人だから。  
もう大人だから。

響の腰をぐっと押さえる。  
逃げられないように。

俺のモノになるように。

「や……やめろ……」  
か細く声を漏らす響。  
その嫌がる声すらも愛らしく聞こえる。  
俺は理性の籠（たが）を外し、響のアナルへと自分のペニスを挿入した。  
「いやああああああああああああ！！」  
麗しく悲しい声がトイレに響き渡る。

ああ、なんて美しい声なのだろう。

逃げようとする響の腰を俺は離さなかった。  
背中を振ろうとする響を離さず、俺は奥まで一気に貫いた。  
美しい背中が俺を誘う。  
零れる涙が俺を狂わす。  
柔らかく温かく、また蠢く響のアナルが俺を狂乱させる。  
今まで味わった事のないような感触。

あのコカが調教した名器を寿は今、味わっていた。  
「……は、はは、ははは、あははははははは！！　　すげえ！　　たまんねえ！」  
寿は狂ったかのように笑い始めた。  
笑いが押さえきれない。  
ぬるぬるした響の体に残るコカの残滓。  
男に犯され、黻られ、男が狂うよう調教されたアナル。

あのコカが手塩に掛けてそだてた男を寿は今、犯していた。

「いや！　嫌だ！　もう抜いてくれ、寿！　ダメ！　止めてくれ！」  
「ダメって何が？　コカ以外の男に犯されたのは初めてか？」  
響がびくっと体を震わせ、真っ青になって俯く。  
「凶星か。若葉君に手を出す男女を籠絡してきた響も、バックはコカだけの場所だったわけだ。  
そうだよなあ、あんな冷酷な顔をする響のアナルを犯そうなんて雑魚共には想像付かないだろうよ」

俺は腰を振った。パンパンといやらしい音がトイレに鳴り響く。  
ああ、犯しているんだ。征服しているんだ。  
俺が響を、コカの情夫を犯しているんだ。  
全面戦争も厭わない。  
この男を手に入れるためなら。  
この愛らしい男を手に入れたい。  
感じさせたい。

燃えさせたい。

俺に恋をさせたい。

響がコカを見るあの瞳が欲しい。

愛してると囁く声が欲しい。

俺は響のペニスを扱きながら素早く腰をピストンしていた。

「ガチガチじゃねえか。ははっ、犯されながらチンポ勃起させる響ちゃん、気持ちよさそうだな」

「ふざけるな！」

「この淫乱男が。少しはサンガの気持ちが分かったか？」

「……っ」

「レイプはよくないぜ？」

「だったらお前も今すぐ止めろ！！」

「お前がイッたらな。そんな締め付けんな。本当に淫らな体だな」

「あんっ」

喘ぎ声を上げ、響は真っ赤になりうつ向いた。

「もっと声を上げろ。ジョンに聞こえるぐらいな」

「もう止めてくれ。頼むから」

「お前はもうジョンと恋人じゃないんだろ？」

「だったら俺と付き合えよ。」

「優しく愛してやるぜ？」

「お前とだって付き合える筈がないだろ！」

「……そうだな。だったらセフレになるっていうのはどうだ」

「こんなレイプ犯とセフレになるなんて、お断りだ！」

俺はむっとし、響の乳首を捻り上げた。

「ああっ！」

背中を仰け反らせ、天井を見上げる美しい青年。

そのピンク色に染まった背中が俺を誘う。

「お前、本当に嫌がってんのか？」

色っぽい声は上げる、体は興奮しきってる、背中からは汗が噴き出し、

アナルは俺のペニスを咥えて離さない。

「ほら、今もそんなに締め付けて……もう我慢出来ねえよ」

俺は響の耳元で囁いた。

「種付けしてやるよ。たっぷりとな」

響はさっと青ざめて、振り返った。

「や、やだっ！ 止めてくれ！ 中には出さないでくれ！

頼むから！」

「ここまで来て止められるわけがないだろ？」

俺は逃げられないように、ぐっと響の腰を押さえた。

「いくぜ！」

「やだ……やだやだやだやめてっ！！」

泣き叫ぶ響の顔は何故これ程までに美しいのだろう。

そして嫌がる体は何故これ程まで愛らしく俺のペニスを締め付けるのか。

まるで吸い込むように。

精を吸い上げるように。

絡まり締め付け、腰を振り、誘惑するような瞳で男を見る。

涙で濡れたその瞳。

濡れた睫毛。頬。

誰もが欲しがらる麗人のアナルへと俺は興奮したペニスを挿入していた。

「響……愛してるっ！」

「いやああああああっ！ ジョン！ 助けて！」

迸る熱い想いが響の体内へ放たれたその瞬間。

「手を挙げろ！」

トイレの扉が開き、大勢のSPが雪崩れ込んできた。

肩に走る鋭い痛み。

性欲が放たれた快感と同時に来る、眠気。

俺は一瞬のうちに眠りへと落ちていった。

★

「三鳥井さん、三鳥井さん」

声がする。響によく似た声。そう、学生時代の響は今のよう低い声ではなくて、もっと高い声だった。

目を開けるとベッドの中にいる。

濡れた下着。

俺を起こす伊藤若葉。

全て夢だったのか。

「三鳥井さん、下着……替えた方がいいですよ」

夢精した俺を気遣って、伊藤君が小声で言う。

「……ああ、ありがとう」

俺はじっと伊藤君を見た。名波夫人によく似た甘いフェイス。

兄のような冷たさはなく、のほほんとした雰囲気だ。

兄弟なのだが、その雰囲気を感じられない。

いや、髪質とか、所々体格が似ているか。

だが雰囲気が違うせいで他人のようだ。

……この青年も円さんとの関係の中で、兄のような妖艶な雰囲気を醸し出すようになるのだろうか。

いや、その片鱗はもう既に見え始めている。

愛は、そしてセックスは男を変える。

俺は名波を見た。

コカに抱かれ、優しい笑みを浮かべている。安心しきったその寝顔。

こんなに近いのに、遠く……とても遠く感じる。

愛するわけがない。

愛せるわけがない。

俺と名波はライバル会社の後継者なのだから。

俺達が結ばれるのは……そう、合併という名の結婚のみだ。

そして今、ヤツは赤い帝王の恋人。

恋人にすらなれない。

手が出せるわけがない。

あの響を抱く太い腕を払って奪うなど、出来るわけがない。

いくら好きでも、いくら抱きたくても、響は手に入らない。

あの日。

俺が先輩達の企みを告白して、いや響を助けたのが俺なら運命は変わっていただろうか。

しかし何度考えても、俺が保身を捨てて響を助けるわけがない。

俺とコカでは力の差がありすぎる。

そう、何度同じ事が起きても俺は響を助けられなかったんだ。

絶望的な過去と灰色の未来。

出会った時から俺達が結ばれないのは決定付けられていた。

「……何をみているんですか？」

伊藤君が警戒した声で言う。

「名波をみていた。

……夢の中では俺に腰を振って喘いでいたのにな」

リアルでは遠い。遠すぎる。

「夢で良かったです。三鳥井さんみたいなプレイボーイが相手じゃ、名波さんが可哀想ですよ」

「おいおい、取引先と寝る数じゃ、コカの方が多いぞ」

無邪気な青年がむっとした顔をする。なんとも可愛い。

「でも……コカさんの方が誠実そうです」

「俺には誠実さがないってか？」

「あるようには見えませんね。そもそも先程、あんな酷い事を名波さんにしたくせに。

僕、この屈辱、一生忘れませんからね」

可愛い顔が、ずっと真顔になる。

「そんなに嫌わないでくれよ」

「嫌われるような事をしたのは三鳥井さんです」

「そんな起こった顔も可愛いな、君は。

そういう表情、お兄さんによく似てる。

伊藤君もお兄さんみたいに感じやすいの？」

次の瞬間、枕がぱふっと俺の顔面に飛んできた。

「最低」

枕の向こうから聞こえてくる険悪な声。

俺はあははと笑った。

好かれないなら、嫌われてもいい。

でも好かれない。

名波響に。

<終り>

20121231

ブログ『藤間紫苑の短篇小説』より <http://fujimashion.seesaa.net/>

お久しぶりです。

この『コカアディクション5』はブログ連載していたものです。  
藤間紫苑の短篇小说 <http://fujimashion.seesaa.net/> にて不定期連載しています。  
良かったらこちらも応援をよろしくお願いします。

今回は三鳥井寿篇です。  
中小企業である名波響に大企業の三鳥井寿がつい夢中になってしまったというお話です。  
もちろん響はがっちりとジョンが抱きかかえているわけで……。  
そんなこんなの終り方でした。

現在、続きを執筆中です。  
電子書籍化するのはもっと後になると思いますが、これからも応援をよろしくお願いします。

また現在、江川広実さんと共同で『ゆりにん』を連載しています。  
こちらもよろしく！

Pixiv [http://www.pixiv.net/member\\_illust.php?mode=medium&illust\\_id=30914739](http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id=30914739)

パブー <http://p.booklog.jp/users/egawayan>

2013/05/22 藤間紫苑

【BL ドリンク擬人化】 コカアディクション1～4 ～『伊藤君と円先輩』  
サイドストーリー～

2012/07/06 第四巻増補版

<http://p.booklog.jp/book/42876>

著者：fujimashion 藤間紫苑

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fujimashion/profile>

藤間紫苑公式サイト：<http://www.fujimashion.com/>

藤間紫苑ツイッター：<https://twitter.com/#!/fujima77>

イラスト：石原理（いしはら さとる）

石原理公式サイト：<http://www.denpajack.net/>

↓ 『伊藤君と円先輩』をネットで購入する ↓

<http://www.bird-ex.net/products/detail5895.html>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42876>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42876>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.